ドストエフスキイ研究会便り（10）

カラマーゾフの世界 — スメルジャコフを巡る人々

（3）. イワンの「生涯で最も卑劣な行為」

はじめに

『カラマーゾフの兄弟』のブラック・ホールとも言うべき存在スメルジャコフについて、第1章と第2章の二回で（「研究会便り（8）（9）」）、我々は彼の精神史の全体像をある程度まで見渡せる地点に至った。そこでまず認められたのは、彼の出生と運命の理不尽さと醜悪さが彼の心に刻み込んだ深い闇であり、その悲劇性と悪魔性であった。イワンが見出したのは、彼の内に蠢く「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」の存在であった。その闇の極点から響くのは、彼が MARIA との逢瀬の際に発した、グレゴリーとイエスに向かったの呪詛の言葉である。だが同時に彼の内には、その悲劇性と悪魔性から初めて生まれもする、病的とも言うべき感性と思考の繊細さと鋭敏さも認められ、我々はそこに形而上学的宗教的磁場に触れた悪魔的豊饒さと奥行きという逆説さえ見て取り得ると考えた。このブラック・ホールが闇の奥から我々に示し、また突きつけてくる問題は少なくないのだ。作者ドストエフスキイは、スメルジャコフをこのような闇と光の分裂と混沌の内に据え、その分裂と混沌を、異母兄弟イワンとの出会いを決定的な契機として、究極どこに行き着かせようとしているのか。

今回はイワンに焦点を絞ろう。真夜中、イワンが息を殺して階下の父親の動静を窺う姿。この鬼気迫る場面の考察から入り ①、「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」イワンが、モスクワにおいて如何なる思索を展開していたかを概観しよう。スメルジャコフに続きイワンの精神史を明らかにして初めて、我々は帰郷後の二人の出会いと交流の意味を、時間的にも空間的にも真の奥行きを以って知ることが出来るであろう。本章では殊に、福音書磁場での思索を展開し、イエスの十字架を凝視するモスクワのイワンに焦点を絞りたい。そのことでイワンの二つの叙事詩、「大審問官」と「地質学的変動」の思想が共に、彼の「神と不死」の探求、そしてイエスと「キリストの愛」との対決から生まれた結実、しかも否定的結実であることが明らかとなるであろう ②。イワンの家畜追込町への帰郷後、新たに展開するのは、スメルジャコフによる運命への復讐劇である。この下男は、若旦那イワンから伝授された「地質学的変動」の人神思想を隠れた武器として、若旦那を「父親殺し」の実行に向けて引きずってゆくであろう ③。そしていよいよ血の「一線の踏み越え」。二人はそれぞれの良心に臨む「裁きの神」によって、それぞれの地獄に突き落とされる。ゾシマ長老が予言した「悪業への懲罰」の現前である。それは彼らの積み重ねてきた精神史に応じて展開する、これもまた懼るべき「罪と罰」のドラマである ④。その地獄の底での三度にわたる対決。それぞれの神との出会いに至った二人を待ち構えているのは、スメルジャコフの自殺という新たな悲劇だ ⑤。最後に我々が検討するのは、二人の兄の

悲劇を見守り続けるアリョーシャの神への祈りである。そこに見出されるのは、「悪業への懲罰」の末に兄たちが選び取るそれぞれの新たな道、つまり「絞首台」への道と「十字架」への道を見据えるアリョーシャであり、その「実行的な愛」の姿である〔6〕。

「神と不死」の問題を巡って展開する、ドストエフスキイ文学の総決算とも言うべきイワンとスメルジャコフとの対決。二人の精神の軌跡が交差し、そして離れてゆくドラマは複雑で捉え難い。限られた紙数ではあるが、また前後した叙述や繰り返しも多くなるが、福音書の磁場で展開するドラマの骨格を出来るだけ明確に浮き彫りにするよう努めたい。

2018年2月28日

※ ※ ※

イワンに関して考察すべき問題は実に多い。様々な角度からのアプローチが可能であるし、また必要であろう。本論は上の「まえがき」に記したように、二回にわたるスメルジャコフについての考察に、新たにイワンについての考察を切り結ばせ、そこから「ロシアの小僧っ子」としての二人の生と思索の在り方を、父親殺しを巡って、福音書の磁場の中で浮き彫りにしようというものである。そのためには複雑な高次方程式のように様々な変数を扱わねばならず、二人の対比と考察だけでも既に多くのスペースを必要としてしまい、イワンに関する問題のみを個別に論じることはなかなか出来なかった。以下に本論の筆者が今まで取り組んできたイワン論を記しておくので、参考にして頂きたい。

1. 『カラマーゾフの兄弟論 — 砕かれし魂の記録 —』前編V、後篇VII B C（単行本、河合文化教育研究所、2016）
2. 「ドストエフスキーと現代 — アポカリプスの予言とその行方 —」（雑誌『キリスト教文学研究』、33号、日本キリスト教文学会、2016）
3. 「ドストエフスキイ研究会便り（5）～（7）、殊に（7）『一粒の麥』の死の譬え — 『カラマーゾフの兄弟』におけるユダ的人間論とイワン —」（河合文化教育研究所 HP、2017）
4. 「イワン・カラマーゾフのキリスト — 「大審問官」、福音書からのアプローチ —」（雑誌『ドストエフスキイ広場 No.26』、ドストエフスキイの会、2017）

1は、『カラマーゾフの兄弟』全体との取り組みの中でイワンの精神史を扱ったものであり、本論の土台となる論考。殊にモスクワにおけるイワンの思索の足跡については、本論が最も広範かつ系統的に扱っている。

2と3は、新約聖書におけるユダヤペテロら弟子たちによる師イエスへの裏切りを取り上げ、それとイワンの思想・行動とを対比させ、その現代的意味を考察したもの。

4は「大審問官」を中心にイワンの福音書との取り組みに焦点を絞り、彼が言う「常識」という名の悪魔の「否定の精神」について考察したもの。

※なお「ドストエフスキイ」の表記であるが、「ドストエフスキー」や「ドストエーフスキイ」等、ロシア語の発音表記の捉え方により様々なものがあり得る。凡例で示したように、本論は「ドストエフスキイ」と記している。

第3章.

イワンの「生涯で最も卑劣な行為」 [第五篇6より]

目次	[ページ]
1. イワンの「願望」	3～7
2. モスクワのイワン	7～17
3. 帰郷、「父親殺し」、そして逃走	17～26
4. 「悪業への懲罰」、三度の対決	26～39
5. 新たな悪魔的恋劇、「兄弟殺し」	39～40
6. アリョーシャの祈り	40～42

1. イワンの「願望」

階下を窺うイワン

真夜中。カラマーゾフ家の二階。イワンが密かに階段の上に立ち、階下の部屋にいる父フォードルの動静をじっと窺っている。「奇妙な好奇心に突き動かされ、息を殺し、胸をどきどきさせながら」の五分間。同じことが二度繰り返される。イワンのこの「行為」について、筆者はこう記す。

「何のためにこんなことをしたのか。何のために耳を澄ませていたのか。勿論、自分にも分かってはいなかった。この《行為》をイワンはその後、一生の間《醜悪な行為》と呼び、また一生の間、心の奥底で、魂の秘密の部分で、自分の《生涯で最も卑劣な行為》と考えていた」(五七)

イワンの生涯にわたる恥辱的行為を暴露した筆者は、この夜イワンの心で起こっていたことを記すのは時期尚早であり、かつ説明も難しいとする。なぜならばそれは「思考の流れ」というよりは、「桁外れの興奮」がもたらした「何か非常に漠然としたもの」であったからだという。それは「観照者」スメルジャコフが密かに積み重ねた、言葉にならぬ「印象」のようなものだったのかもしれない(前回、第2章^[3])。だが同時に筆者は、この時「冷静さを失った」イワンの心を占めていた様々な「願望」について、少なからず説明を試みるのである。息を殺し階下の父の動静を窺うイワン。彼の心を占拠していた「願望」とは何であったのか。

イワンの心にあった三人

注意すべきは、この時イワンの心を占めていた人物として、筆者が三人の名前を挙げることである。スメルジャコフとアリョーシャとカチェリーナである。それぞれがイワンにとって重大な意味を持つ存在だ。そして実際イワンはこの日、これら三人と決定的とも言うべき対決をしていたのである。時系列に沿い、それらを確認してゆこう。

カチェリーナ

まずはカチェリーナ・イワノーヴナである。そもそもイワンの帰郷の目的の一つは、長兄ドミートリイの婚約者カチェリーナとの恋に、何らかの決着をつけることにあった(五3)。イワンが春に帰郷してから数か月の間に、何時カチェリーナが家畜追込町を訪れ、またその後如何なる交流があったのか、筆者は何も記さない。ところがイワンは夏の終わり、八月末から九月初めにかけてのこの日、ホフラコワ夫人宅で、カチェリーナに「決別」の宣言をしていたのである(四5)。だがイワンは自分の言葉を信じてはいなかった。再会後なお強く燃え上がったカチェリーナへの思い、これを消し去ることなど決して出来はしないことを、彼自身十分に承知していたのだ。ところが筆者によれば、この夜息を殺して階下の父の動静を窺うイワンの心の中には、カチェリーナの影は微塵もなかったのである。後にこの事実を思い起し、イワンは「愕然とした」と記される(五6)。カチェリーナを追い払って、この時イワンの心を占拠していたものとは何であったのか。

アリョーシャと「大審問官」の劇詩

次に弟のアリョーシャである。カチェリーナとの「決別」の後イワンは、料亭の「みやこ」で「神と不死」の問題を巡り、弟のアリョーシャと帰郷後初めて正面からの対決をする(五3-5)。ここでイワンがアリョーシャに語り聞かせる「大審問官」の叙事詩あるいは劇詩とは[以下、劇詩とする]、「地質学的変動」の人神思想に先立つ、彼の人間論とキリスト論の総決算とも言うべきものである。そしてこの劇詩の最後にイワンが描くのは、ユダたる大審問官の裏切りに対して、キリストが接吻を以って応える場面だ。この接吻とそれに続く場面とはモスクワにおけるイワンの思索の到達点を知る上でも、またアリョーシャが生きる「実行的な愛」を理解する上でも極めて重要な場面である。「大審問官」の劇詩自体は次の[2]で扱う予定であり(本章[2]-4)、記述は少々先取りとなるのだが、真夜中に階下の父親の動静を窺うイワンの心を理解するためにも、この一連の場面はここで一度確認をしておこう(「研究会便り(7)ーイワン(2)ー」も参照)。

モスクワにおけるイワンの「神と不死」探求の旅、殊に福音書のイエスとの取り組みの行き着くところ、それはこの地上においてイエスを二重に裏切る「ユダ」たちの発見であった。そのユダとは、まずは人間存在そのものである。人間と世界とその歴史を凝視するイワンの眼に、人間とは弱く愚かな存在でしかなく、絶対の自由の内に神に向かうことを説く「キリストの愛」を受け容れる力など持ちあわせてはいないのだ。地上に満ちる幼な子たちの涙を凝視するイワンが、その裏返しに得た否定的悲観的人間観である。更にもう

一つのユダたる存在、それはこの弱く愚かな人間たちに、「天上のパン」に代り「地上のパン」を提供することで、彼らを自らの奴隷とするに至った「大審問官」たちの存在である。イワンによれば、世界とその歴史を支配してきたのはこの大審問官たちなのだ。かくしてイワンにとり、弱く愚かな人間たちにせよ、その人間を奴隷として支配する大審問官たちにせよ、この地上とは神と「キリストの愛」を裏切るユダたちが満ちる世界に他ならない。

だがイワンが自らの劇詩の終局に提示するのは、そしてそれに対するアリョーシャの反応は、一連の衝撃的と言うべき場面であり行動である。つまりイワンはユダたる大審問官に対し、イエス・キリストが沈黙の内に接吻を与える場面を描くのだ。ここにいるのは裏切りのユダに対してさえ向けられる「キリストの愛」を深く理解し、それに心を揺り動かされたイワンに他ならない。ところが更に驚くべきことに、この決定的とも言える感動的な場面の直後に続くのは、もう一つの衝撃的な場面である。イワンは、大審問官がイエスを追い払う場面を以って劇詩を閉じるのだ。「この接吻は老人の胸の内に焼きつけられていた。だが彼は己の^{イデオ}考えに踏み留まった」(五五)。

「キリストの愛」を最終的に斥けた「ロシアの小僧っ子」イワン。我々が前回見たスメルジャコフとイワンとの出会いと交流、その核となった「地質学的変動」の人神思想とは、この劇詩の終局のキリスト追放にそのまま連なるものであることがここに確認される。モスクワにおいてイワンは、「人類七千年の習慣」が作り上げた「良心」を棄て去り、自らの内なる「神という観念」を根絶させ、更にはイエスと「キリストの愛」をも斥けた末に、自らを「一切が許されている」神として、故郷に乗り込んだのである(前回、第2章⁵)。

だが「大審問官」の劇詩はこれで終わらなかつた。続いて兄弟二人の間に生じたのは劇詩を受けた現実、アリョーシャがとった、これも衝撃的と言うべき一つの「行動」である。神と「キリストの愛」を斥けたイワン、敢えて言えば神を殺しイエスを磔殺したユダ・イワンに対し、アリョーシャは自らの接吻を以って応えたのである。

「ホザナ！」の一瞬

十字架に至るまで自らの生を「実行的な愛」に捧げたイエス・キリスト、そのイエスと「キリストの愛」を理解しつつも、イワンが完膚無き迄に斥けた直後、今度は弟のアリョーシャが自らの接吻によって、活けるイエスと「キリストの愛」を兄に伝え返したのだ。イワンは心の底から揺り動かされる。「肯定と否定」の間を揺れ動きつつ、モスクワで一人孤独の内に探求し続けた「神と不死」の問題、その究極の到達点たるべき「ホザナ！」の一瞬を、思いもかけずイワンは弟アリョーシャによって与えられたのである。聖書世界のユダの接吻に発した波紋が、ゴルゴタ丘上のイエスの十字架を介し、遙か遠く時空を超えて『カラマーゾフの兄弟』の世界にまで及び、新たな「キリストの愛」としてイワンに殺到した一瞬である。ドストエフスキイ文学の最深奥に位置する「ホザナ！」の一瞬とも言えよう。筆者はイワンが、内から込み上げる感動をこう表現したと記す。

「いいか、アリョーシャ。もし俺が本当に粘っこい若葉たちに向き合うことになるとするならば、それはお前を思い出すことによって初めて、それらを受るといふことなのだ。お前がこの世界の何処かにいてくれるというだけで、俺にはまだ生きてゆくだけの力をなくさずに済むだろう。お前にはこんな話ほうんざりか？ 何なら、これを愛の告白と受け取ってくれてもいい。さあ、それではお前は右、俺は左だ。これで十分だ。そうだろう」(五五)

イワンの奥深くに脈打つ春の「粘っこい若芽たち」への愛。彼は自分の内なる生来の生命愛が、更に奥深くの神と「キリストの愛」に支えられることで、初めて浄化され聖化され、この世界で「生きてゆくだけの力」となるのであることを、アリョーシャの接吻によって一瞬の内に自覚させられたのだ。だが(この「だが」が続くことに注意しよう!)、この「愛の告白」のなされた日の正に当の夜、息を殺して階下の父の動静を窺うイワンの胸の内からは、カチェリーナの存在に次いで、既にこのアリョーシャの接吻の感動さえもが消え去っていたのである。消え去っていたどころか、筆者によればアリョーシャとの会話を思い起こすと、イワンには既にこの弟が、更には自分さえもが「憎らしく」思われたという。「だが」という否定を、一切に対して発動し続けるイワン。この「ロシアの小僧っ子」の心はどこに向かっていたのか。

スメルジャコフ

内に燃え盛るカチェリーナへの愛。一瞬とは言えアリョーシャによって触れさせられた神と「キリストの愛」の活きたリアリティ。そして春の「粘っこい若葉たち」への真の愛の展望。だがその帰り道、イワンは既に深い「憂愁」に捕われていた。「耐え難い」とも、「得体の知れぬ」とも、「胸のむかつくような」とも記される、この憂愁の虜となったイワンを待ち受けていたのは、夕涼み中のスメルジャコフであった。カチェリーナとアリョーシャとを追い払って、第三の人物の登場である。

二人の対話の詳細は省こう。この下男スメルジャコフの「学者じみた」冷静かつ巧妙な罠に絡め捕られたイワンは、この「前衛的肉弾」が周到に準備を重ねていたフォードル殺しの計画の「実行」に、結局いつの間にか同意をさせられてしまっていた(五六)。その直後のことだ。スメルジャコフの驚いたことに、イワンは出し抜けに声を上げて笑い出し、そのまま笑い続けてその場を去って行ったと記される。筆者はその笑いが決して「愉快さ」からのものではなく、「どうにも説明がつかぬ類いのもの」であったと付け加える。その先にあるのが本章の冒頭、真夜中、階段の上から息を殺して父親の動静を窺うイワンの姿である。

筆者はこのイワンについて、真夜中にもかかわらず、彼は突如階下に降りてゆき、別棟にいるスメルジャコフを「叩きのめしてやりたい」気持ちに捕われたと記す。だがイワンはその理由を聞かれても、あの無礼この上ない下男への「嫌悪感」からだとしか答えられ

なかつただろうとも記される。スメルジャコフに対する説明のつかない凶暴な怒りと嫌悪感。その一方でこの夜のイワンは、「正体不明の屈辱的な臆病風に何度か肝を冷やされ、このため突然、肉体的な力さえ失ったかのような感がした」とも記される。前回見たように、スメルジャコフの思考の「支離滅裂さ」と「落ち着きのなさ」、またこの青年が駆り立てられている「執拗な不安」、更には彼の内に蠢く「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」と突き当たって以来、イワンのこの異母兄弟に対する姿勢は、それまでの熱気に満ちた関心が消え、代って「嫌悪感」と「臆病風」という負の感情に翻弄される混沌としたものとなってしまったのだ（第2章^[6]）。

真夜中、息を殺して階下の父親の動静を窺うイワン。我々の前に立つのは、最早持ち前の鋭利な知性のコントロールが失われ、カチェリーナをもアリョーシャをも意識の外に追いやり、下男スメルジャコフに導かれ、心の奥深くから現われ出ようとする「願望」に自らを譲り渡そうとしつつある若旦那イワンである。

ドストエフスキイのこの圧倒的な筆を導入部として、我々は以下にイワンとスメルジャコフが共に踏み込んでゆく「父親殺し」のドラマを追うことにしよう。その際まず我々は、犯行に至るまでの二人の異母兄弟の精神史を概観しておく必要があるだろう。イワンを追いついたスメルジャコフの精神の歴史については、前回まででほぼ全体を見渡せるところにまできている。他方、真夜中に息を殺して階下の父の様子を窺うイワン、スメルジャコフによって懼るべき「醜悪な」、また「卑劣な行為」に踏み込んだイワンの行動と思想とを、我々はどう捉えるべきなのか。このことを十全に理解するためには、そもそも家畜追込町でのスメルジャコフとの出会いに至る以前、モスクワにおいてイワンが如何なる思索を重ねてきたのか、その精神史を概観しておくことが不可欠である。その上で初めて二人の精神史が切り結ぶ交点、「父親殺し」にも十分な光が当てられよう。

2. モスクワのイワン

モスクワのイワン

モスクワでイワンが辿った思索の足跡。ドストエフスキイが描くその全行程を詳細に追うことは、ここでは不可能である（上述の「研究会便り（7）」、また「はじめに」に付した註の「イワン論」も参照）。以下で我々は、イワンの思索の核となる「神と不死」の探求と彼の福音書との出会い、殊にイエスと「キリストの愛」との取り組みに焦点を絞り、これを主軸とし、モスクワにおける彼の思索の足跡を、四つの段階に分けて辿っておくことにしよう。我々の目の前に広がるのは、「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」イワンが残す一直線の足跡であろう。だがよく目を凝らして見ると、この直線とは「信と不信」「肯定と否定」という全く逆方向の足跡によって刻まれる直線であり、イワンがその内深くに宿す悪魔の「否

定の精神」によって如何に苦しめられたかを示す足跡でもあるだろう。四つの段階それぞれで、必要な場合にはアリョーシャやスメルジャコフの思索との対比も試みつつ、「肯定と否定」の間で揺れ動くイワンの精神を確認してゆこう。

1. 「ロシアの小僧っ子」イワン、「神と不死」の探求

アリョーシャと初めて正面から向き合ったイワンは、次のように言う。

「俺もお前と同じロシアの小僧っ子だ。[中略] そういう連中が、飲み屋でわずかな時間を捉えて何を論じると思う？ 他でもない、神はあるかとか、不死は存在するかとかいう世界的な問題なのだ」(五三)

イワンが故郷の家畜追込町を去る前日、ドストエフスキイはイワンに自らの本質と、『カラマーゾフの兄弟』を貫く中心テーマをこの上なく明瞭に表現させたと言えよう。他の兄弟たちと共にイワンとは、何を措いてもまず「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」なのだ。「人間の内にある神という観念」、この不思議の前に立ち、またこの不思議を誤魔化さず、「神」を真摯かつ熱烈に追い求め続ける青年、それがモスクワ時代から一貫したイワンのアイデンティティであることをまず確認しておこう。

だがイワンはその神探求において、ユークリッド的知性の内に閉じ込められた人間が神を捉えることは不可能だとの結論に至る。そして彼は神を天上世界に迫いやるのである(五四)。カント以来の哲学史に即しても、これは極めて正統的な認識論的結論と言うべきであろう。神の熱烈な探究者にして、人間知性による神の認識不可能性を悟った青年哲学者。だがイワンとは、それでも神なきはずの地上世界を「神の世界」として、「隠れたる神」を追い求めずにはいない青年である。「自己矛盾的存在」(西田幾多郎)たる「ロシアの小僧っ子」、「肯定と否定」の間で揺れ動く矛盾・分裂体がモスクワのイワンなのだ。このイワンが地上世界に何を見いだしたかについては、次の2.で確認しよう。

ここからスメルジャコフにも目を向けておこう。第1章と第2章の二回、我々がスメルジャコフの内に認めたのは、イワンと同じく深く聖書的磁場の中に生き、形而上学的とも宗教的とも言うべき思索を展開する青年の姿であった。だがこの青年は、イワンのように「肯定と否定」の間で揺れ動く矛盾・分裂体と言うよりは、既に否定の方向に大きく傾いた「ロシアの小僧っ子」だと考えるべきであろう。創世記が記す光の始原の矛盾を痛烈な皮肉と共に指摘し、地上に「芥子種一粒」でも真の信仰心を持ち得る人間が存在するか否かを問い、その問いへの答えを否定的な方向に打ち出すスメルジャコフ。育ての親グレゴリーイの愛と信仰心を歪めて揶揄し、更にはヨブの叫びを踏まえ、イエスに対して痛烈な呪詛の言葉を投げ返すスメルジャコフ——彼の内に認められるのは、不幸な運命によって刻印された悲劇的悪魔的心性であり、具体的には理不尽で醜悪な己の運命に対する激しい怒りと、万人万物一切に対して向けられた呪詛の心と復讐心である。だがこのスメルジ

ヤコフを、ただ異様で忌まわしい矛盾・分裂体であり、悪魔的存在であるとして抽象的否定的に捉え、片づけてしまってはならないだろう。なるほどスメルジャコフという人物が、恐るべき忌まわしい事件を様々にまき散らす、悪魔性を備えた存在であることは否定出来ないであろう。だが自らの投げ込まれた醜悪な運命の底で、この人物が内に「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」を疼かせつつ、神とイエスを始めとし、万人万物一切に呪詛を投げつける姿からは、この上なく鋭利で敏感な形而上学的宗教的心性が閃き出ていることも、我々は見逃してはならないであろう。既に繰り返し記したことであるが（第1章、「研究会便り（8）」）、本論が最大の課題とするのは、自らを凡庸な常識の内に閉じ込めてしまう我々の感性と知性を激しく打ち破る何ものか、或る逆説的豊饒性と呼ぶべきものを、この悲劇的悪魔的存在の内に見出すことに他ならない。

イワンとスメルジャコフ。これら異母兄弟は遠く離れたモスクワと家畜追込町において、将来の出会いに向け、それぞれの精神を孤独の内に育む「ロシアの小僧っ子」であったことを、まずは確認しておこう。

2. 地上世界の不条理、「罪なくして涙する幼な子」たちとイワン

人間知性による神認識の不可能性ゆえに、天上に神を追いやったイワン。だが先に見たようにこの青年は、神なきはずの地上世界をなお「神の世界」として、「隠れた神」を追い求めずにはいない矛盾・分裂体、「自己矛盾的存在」としての「ロシアの小僧っ子」であり続けたのだ。だがこの青年が地上世界に見出したのは、罪なき幼な子たちの涙がただ流されるだけの悲惨な現実でしかなかった。罪なき幼な子たちの受難は何のためにあるのか？ また如何にして贖われるのか？ 苦しむ者たちの「目より凡ての^め涙^{すべ}を^{なみだ}拭^{ぬぐ}ひ^{たま}給ふ」はずの神を（ヨハネ黙示録七 17）、既に天上に追いやってしまったイワンにとり、地上の不条理の意味を説明し、またその贖いを引き受ける責任主体はどこにも見出されない。幼な子の母親でさえ、と彼は続ける、その子から流されてしまった涙、既に味わわされてしまった苦悩の絶対性ゆえに、その子を癒す力も贖う力も持ち得ないのだ。「俺は、神の世界を認めない！」（五4）。イワンが行き着いたのは認識論的神否定に続く、倫理的な神否定である。彼はまたも神を天上に追いやったのだ。その果てに彼の前に広がるのは、ただ「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」が駆け巡るだけの荒涼索莫たる地上世界でしかない。『カラマーゾフの兄弟』の読者誰もが心を揺さぶられずにはいない、イワンの圧倒的な論証である。

ここで我々は、アリョーシャについても考えておかねばならない。「罪なくして涙する幼な子」たちの受難、世界を支配する不条理を弾劾するイワンに、弟のアリョーシャも心を揺り動かされずにはいなかった。だがこの青年は、兄イワンの認識と弾劾を「叛逆」だと断言するのだ（五4）。本章の始めに見たように、動かし難い絶対的不条理としか思われないうこの現実世界を前にして、神に向かい、イエスに向かい、そして「キリストの愛」に向かうのがアリョーシャである。彼は兄のイワンが、その認識論的神否定を倫理的な神否定に

繋げてしまったこと、とりわけ兄がイエスと「キリストの愛」に焦点を合わせ切らずにいることを非とするのだ。世界と神に関する兄イワンの認識とは、たとえそれが如何に人の心を抉る痛切鋭利な認識であろうとも、アリョーシャにとっては画竜点睛を欠いた不徹底な認識でしかなかったのである。本章で繰り返し見るように〔1〕、〔3〕、〔6〕、地上世界を支配する不条理を前に、如何にイエスと「キリストの愛」、そして「神の愛」に目を向けるか、また自らの内なる「肯定と否定」「信と不信」の分裂という事態に突き当たり、人は如何に肯定の立場に立ち得るかという問題は、ドストエフスキがこの作品の底に据えた根本的問題軸であり、これはこの後イワンとゾシマ長老との対決の場でも、改めて確認されるであろう〔3〕(1)。

ここからスメルジャコフとイワンとの関係にも目を向けておこう。これも繰り返し指摘することだが(第1章〔3〕、第2章〔6〕、本章〔5〕)、「罪なくして涙する幼な子」たちを指し示しつつ、地上世界とそれを司る(天上に追放されたはずの)神を弾劾するのはイワンである。だがイワンの目の前にいる異母兄弟、父親の下男として生きるスメルジャコフこそ、正にその「罪なくして涙する幼な子」の極たる存在に他ならない。ところが「灯台下暗し」、イワンはこの下男に「地質学的変動」の人神思想を熱く説き聴かせるものの、下男が負わされた運命のことも、理不尽で醜悪な運命によって彼が追い込まれた闇のことも一切理解しようとはしないのだ。前回から見ているように、この若旦那は下男の内に蠢く「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」に気づくや「嫌悪感」の虜となり、この下男から距離を置き始めてしまうのだ(第2章〔6〕)。ここにもまた我々は、この上なく鋭利な知性と敏感な感性とに恵まれたイワンの、認識上倫理上の致命的な矛盾・欠陥が存在すること、また若旦那イワンが持つ「倨傲の精神」、敢えて言えば原罪性と言うべきものの存在を認めざるを得ない。イワンが抱えるこれらの矛盾・分裂・過誤は、イワンとアリョーシャとの間に大きな隔絶を生むばかりか、イワンとスメルジャコフとの出会いと交流の底にも潜み、やがて二人の対決と永遠の別れを生む決定的な原因ともなるであろう。

3. 十字架、「キリストの愛」の凝視

十字架のイエスへの感動

神を天上世界に追いやったイワンの前に広がる世界。繰り返しとなるが、それは罪なき幼な子たちの受難が繰り返されるだけの世界、ただ彼の「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」のみが駆け巡る荒涼索莫たる不条理の世界でしかなかった。つい今も我々は、この荒涼索莫たる曠野を前にして、神に向かい、イエスに向かい、そして「キリストの愛」に目と心に向けるのがアリョーシャであることを確認した。だが実はイワンもまたイエスと出会い、「キリストの愛」と出会い、心を揺り動かされる青年だったのである。我々はこの事実についても、しっかりと確認をしておかねばならない。

イワンが福音書のイエスと正面から向き合っていたこと、このことを我々が知るの^{チョールト}は「悪魔」によってである。この悪魔とは、これからもしばしば取り上げるのだが、イワン

の分身に他ならない。スメルジャコフに導かれて、父親殺しの罪の決定的な自覚と神との出会いを果たし、かつ人格崩壊も進むイワンの内から現われ出た悪魔は、モスクワで人神思想を産み出していた頃のイワン、力と野心に溢れるイワンを再び呼び戻そうと試みるのだ。この悪魔が、イワンとの対決の終盤、モスクワにおいて十字架上のイエスと向き合うイワンの姿を回想するのである（十一9）。ルカ福音書が伝えるゴルゴタ丘上でのイエス磔殺の場面である（二十三 32-43）。悪魔によると、一緒に十字架につけられた二人の罪人のうち、右側の悔い改めた罪人を抱き、天使たちが謳う讃歌の中を昇天してゆくイエスの姿に、イワンは感動のあまり「ホザナ！」を叫びそうになったというのである。

ルカを始め諸福音書が伝えるイエス・キリストとは、イワンが弾劾する「罪なくして涙する幼な子」たちの満ちる世界において、神を愛として捉え、あるいは神の愛に捕らえられ、その愛を十字架上で磔殺されるまで貫いた存在であったと言えるであろう。「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」のみが駆け巡る荒涼索莫たる不条理の世界と向き合ったイワンは、十字架によって示された「キリストの愛」を前にして、それをこの地上世界に打ち立てられた唯一絶対の真理として認識するに至り、「ホザナ！」さえ叫びかかったのだ。イワンの卓越した知力は、アリョーシャに指摘されるまでもなく、既にイエスと「キリストの愛」に照準を合わせていたのである。アリョーシャと同じくイワンもまた、「キリストの愛」に心を震わせる「ロシアの小僧っ子」なのだ。

「ホザナ！」、そして悪魔の「否定の精神」

だが悪魔が伝えたかったのは、そしてイワンに思い出させようとしたのは、イワンの心のもう一つの現実である。十字架上のイエスへの感動のあまり「ホザナ！」を叫びかかったものの、実はイワンは最後の最後になってその叫びを押し留めてしまったのだ。「ロシアの小僧っ子」イワンの心の内には、「キリストの愛」に素直に心を開かせ切らない何か、アリョーシャのようにその愛を素直に生きることをさせない何ものかが存在していたのである。彼の悪魔はそれを「常識」と呼ぶ。「だが常識が、僕の最も不幸な特性がギリギリのところ僕を引き留めて、僕は折角の瞬間を逃してしまったのだ！」（十一9）。悪魔によれば、この「常識」という名の「否定の精神」とは、世界成立に「必要不可欠なマイナス」であり、これをイワンの内で発動させることが、他ならぬ自分がイワンの許に遣わされた最大の使命であるとするのである。「僕は君を導いて信と不信との間を絶えず行ったり来たりさせるのさ。正にここに僕の目的もあるのだよ」（十一9）。この悪魔の「否定の精神」に身を委ねるイワンとは、正にイエスと「キリストの愛」を裏切るユダ・イワンに他ならない。

「ロシアの小僧っ子」イワンとは、十字架を前にして、「肯定と否定」「信と不信」の両極に激しく揺れ動き続ける青年だったのだ。

イワンとアリョーシャとのイエス像の対比は、これで明らかとなった。イワンとスメルジャコフのイエス像の対比については、次の4.で取り上げよう。

4. 「大審問官」の劇詩のイエス、「肯定と否定」

イエス・キリストへの「肯定と否定」、「信と不信」。イワンの相反する両極的姿勢がギリギリにまで煮詰められ、何よりも雄弁に表現されるのは、彼が弟のアリョーシャに語り聞かせる「大審問官」の劇詩である（五五）。悪魔によれば、イワンがこの劇詩を作ったのは一年前だという（十一八）。モスクワから家畜追込町への帰郷の一年前、二十三歳の時のことだ。この劇詩においては、今見た十字架上のイエスに感動し、しかも最終的にはそのイエスを否定し斥けるイワンの矛盾・分裂した精神が、その陰影と振幅の規模を最大限に拡大して表現されるであろう。我々はそのエッセンスは先に確認してあるのだが（本章¹、また「研究会便り（7）— イワン（2）—」も参照）、改めて、より大きな視野の中で見ておこう。

まず何よりも注目すべきは冒頭の場面である。我々はここに福音書との取り組みからイワンが得るに至ったイエス・キリスト像のエッセンスと、そこから与えられた感動が熱く力強く表現されているのを見るであろう。イワン自身この冒頭の場面こそ「自分の劇詩の最も優れた場面になるだろう」と語り、アリョーシャもまた叫ぶであろう。「兄さんの劇詩はキリストに対する讃美であって、弾劾ではない」（五五）。

劇詩の冒頭、中世スペインのセヴィリアの街に再臨のキリストが登場するや、民衆は直ちにそれが「キリスト」であることに気づく。イワンが重ねて表現するのは、地上への再度の登場を決意するに至ったキリストの、民衆に対する「測り知れない同情心」と「限らない慈愛の心」である。このキリストの胸には「愛の太陽」が燃え、その眼には「[神の]光明と叡智と力」が宿されている。一方「それに応える愛で心を打ち震わせる」民衆の内にも、熱い「信仰の炎」が燃えている。イワンが如何に鋭く福音書のイエスに目を向け、また如何に深くイエスを迎える民衆を理解していたかがストレートに伝わってくる場面である。ドストエフスキイ文学の中でも、イエス・キリストを直接表現し、その民衆との出会いと両者の間に通い合う信と愛とを、これほどまでに的確かつ感動的に表現した場面は、アリョーシャが見る「ガリラヤのカナ」の婚宴の夢（七四）以外にまずないであろう。

ちなみに『カラマーゾフの兄弟』においてイエス・キリストが直接登場する場面は三つある。アリョーシャの「ガリラヤのカナ」の夢、イワンの「大審問官」の劇詩において、セヴィリアの街への登場、そして大審問官による審問、これら三回である。恐らく世界文学の中でも、これら三つの場面ほど気韻生動の雰囲気の中にイエスが活写された例は少ないであろう。しかもこれら三つの内の二つまでもが、イワンが表現するイエス像なのだ。聖書に通暁するイワンを前提としない限り、ドストエフスキイはこの青年の手に二度までイエス像を委ねることはしなかったであろう。

イエス・キリストの追放

だが本章の最初で見たように（第1章¹）、イワンの劇詩が最終的に描くのは、大審問官がイエス・キリストを追い払う場面である。ユダの裏切りの接吻に対して返されるキリストの愛の接吻。この「キリストの愛」を大審問官が斥けて劇詩は幕を閉じるのだ。冒頭に

描かれる熱狂的にキリストを迎える民衆と、終局の大審問官による「キリストの愛」の排斥。一体イワンの内の何が、これらイエス・キリストに対する「肯定と否定」両極の反応をかくも露骨に提示させ、最終的に「否定の精神」を発動させてしまったのか。

先に結論を記せば、我々はそれがイエスと「キリストの愛」を前にしたイワンの、「人間の中の悪魔性」についての痛切な認識と、そこからくる人間に対する深い絶望と軽蔑、そしてイワン自身の内に存在する「倨傲の精神」であると考えたい。

ここから改めて「大審問官」の劇詩に目を向けてみよう。

「荒野の問答」、「天上のパン」と「地上のパン」

さてイエスを前にした大審問官は、マタイ福音書に記されたイエスと悪魔との三つの問答、いわゆる「荒野の問答」（四 1-11）に的を絞り、その論述を展開する。「大審問官」の劇詩の頂点の一つである。これら三つの「荒野の問答」の中で、大審問官が最も重点的に論じるのは第一の問答だ。これを通してイワンの思想のエッセンスが、つまりはその人間論とイエス・キリスト論が浮かび上がり、更には彼の「キリストの愛」排斥の理由も明瞭となるであろう。

大審問官によればイエスとは、人間の生の究極の糧は神から与えられる「天上のパン」であるとするイエスであり、また人間は神からその「天上のパン」に向かうべき絶対の自由を付与されているとするイエスである。これは劇詩の冒頭でセヴィリアの街に登場する再臨のキリストと通じ、神と人間への絶対の信と愛を示すイエス・キリストに他ならない。更に大審問官によれば、十字架につけられたイエスに向かい、通りがかりの者たちが「いま十字架より下りよかし、然らば我ら彼を信ぜん」、このような冒涇と嘲笑の声を浴びせても（マタイ二十七 42 [39-44] / [マルコ十五 29-32、ルカ二十三 35-38]）、イエスは決して十字架から下りることはしなかった。イエスが人間に望んだのは、神に向かう自由な信に他ならず、決して奇跡への信などではなかったからだ。人間に対するイエスの絶対の信と愛を見据えるイワンの視線、そのキリスト讃美は一貫したものである。

人間の愚かさと弱さ

続いてイワンが展開するのは、大審問官が自らの登場の必然性を語る長大な論証である。ここにいるのは「聖なるもの」を裏切る「人間の中の悪魔性」、人間の愚かさや弱さを凝視し暴露するイワンだ。この人間論こそ「大審問官」の劇詩に続く「地質学的変動」の思想、殊にその人神思想誕生の土台となり鍵となるイワンの人間論の精髓と考えるべきであろう。以下にその要旨を纏めておこう。

——人間はその生来の弱さと愚かさゆえに、イエスが説く神に向かう自由も、その自由の上に立つべき神への信も自分のものとして受け入れ切れず、自分たちに託された自由をむしろ重荷とするだけであった。このイエスと人間との間であって、イエスの人間に対する絶対の信と愛を知り、また人間本性の弱さと愚かさをも知悉し、かつその人間を愛さず

にはいられない存在が大審問官であった。そしてこれら両者の板挟みの苦悩が大審問官を追いやった結論とは、神の名の下に人間に「地上のパン」を与えることであった。たとえそれが「天上のパン」に代る偽りの平安の付与であろうとも、またそれが彼らが大審問官の支配と管理の下に「ひれ伏させる」という隷属への道であろうとも、そのことにより人間は自由の重荷から解放され、ともかくは平安の内に憩うことが可能となるであろう。そして事実人間は嬉々として、大審問官に自由を売り渡してしまったのだ。

イワンの目に映った人間と世界とその歴史の一切が、二つの方向で煮詰められたと言えるであろう。一方にいるのは、イエスから示された神に向かうべき自由を、「地上のパン」欲しさに、嬉々として大審問官に譲り渡してしまった愚かで弱き存在たる人間、つまり「永遠に背徳的で永遠に下劣な」「鷲鳥のような」人間たち。他方にいるのは、自ら「善悪の認識という呪いを背負い込み」、イエスの「偉業を修正し」、偽りの愛の名の下に哀れな人間を奴隷とするに至った「大審問官」。イワンにとりこの地上世界とはこれら「選ばれし少数の」大審問官たちと、その支配下にある大多数の「意気地なしで、哀れな子供のような」人間たちが占拠する世界なのだ。これら両者はとどのつまり、地上で人間に対する神の信と愛を生きて証し、自由の内に、「天上のパン」に彼らの目と心に向かわせようとしたイエスを裏切り、十字架上に追いやるユダたちに他ならない。イワンが提示しようとしたのは、神と人間に対するイエスの絶対の信と愛を無にする人間の現実そのもの、全人類がその全歴史を通じて示し続けてきたイエス・キリスト疎外、「キリストの愛」の否定というユダの現実そのものだったのだ。イエス・キリストの接吻に心を燃やされながらも、結局は彼を斥けた大審問官の姿とは、モスクワにおけるイワンの思索と認識の総決算であり、それは彼の人間への絶望と軽蔑が具体的な形を取って現われ出たものと言えるであろう。そしてこの人間への絶望の底でイワンが向かうのは、ただ「目覚めた者」のみが歩むことを許された道、神に代って自らを神とする道である。

人間への絶望と軽蔑、そして「倨傲の精神」

「大審問官」に続く「地質学的変動」においてイワンは最終的な結論に至る——人間の内なる「良心」を葬り去り、「神という観念」を「根絶させてしまい」さえすれば（「根絶させる」については第6章^[3]、「研究会便り（13）」で扱おう）、後は「一切が許されている」。そして「人神」の時代が到来するであろう。だが「一体何時、そのような時はやって来るのか。もしその時が到来すれば一切は解決され、人類は最終的な安定を見るであろう。しかし人類に深く根差す愚かさを思えば、恐らく今後まだ千年はその安定はないであろう」（第2章^[6]）。「大審問官」から「地質学的変動」へ。ここに一貫するのは、人間の暗愚の現実というイワンの冷徹な基本認識である。この認識と呼応して「ロシアの小僧っ子」イワンの心の底に蠢くのは、神を天上に追いやろうとする「叛逆」の精神であり、更には悪魔的「否定の精神」、つまりイエスと「キリストの愛」をも排斥し、代って自らを絶対者・「人神」としようとする底知れぬ「倨傲の精神」であることが明らかとなる。

「兄さんは神を信じていない！」

イワンの「大審問官」に対するアリョーシャの反応を我々は既に見てある〔I〕。始めはこの劇詩を「キリストの讚美」としたアリョーシャは、しかし最終的には「兄さんは神を信じていない！」と叫ぶに至るのだ。しかも彼はこの叫びを二度までも上げることに注意すべきであろう。彼は兄イワンが大審問官に「キリストの愛」を退けさせた劇詩の終局に、「ロシアの小僧っ子」イワンの「神と不死」探求の不徹底と誤りを、そして彼の奥深くに潜む悪魔の「否定の精神」を感じ取っていたのだ。このアリョーシャに対して、イワン自身もまた、「大審問官」物語が持つ「虚偽と欺瞞」を認めざるを得ない（「研究会便り（7）〔6〕—イワン（二）—」。アリョーシャにとり、イエスの生と死を通して見るべきは「キリストの愛」であり、またこの「キリストの愛」を通して見るべきは、何よりもまず人間に対する「神の愛」だったのである。「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」アリョーシャが内に持つ「神の愛」と「キリストの愛」への信の強さ、その「実行的な愛」の在り方、そして兄イワンの「虚偽と欺瞞」を見抜く認識力については、次回第4章で検討しよう。

ここでもう一度、アリョーシャのイワンへの接吻の場面に戻ろう。この弟の接吻にイワンは心の底から感動させられ、自らの感動を表わすにあたり、彼は「愛の告白」という言葉さえ用いたのであった〔I〕。アリョーシャの接吻は「キリストの愛」を退けた兄に、もう一度活きた「キリストの愛」を伝え直し、キリストが伝えようとした「神の愛」を一瞬でも思い起させ、彼の内なる悪魔的「倨傲の精神」を、そしてその「虚偽と欺瞞」を無と帰せしめる接吻となったのだ。だがこの感動は飽くまでも一瞬のものでしかなかった。アリョーシャと別れた直後、既に深い憂愁の虜となったイワンを待っていたのは、そしてイワンが心の底から待ち望んでいたのも、スメルジャコフだったのである。イワンの「倨傲の精神」とスメルジャコフの運命への復讐心とがここに切り結ぶ。二人の内なる悪魔が手を握ったのだ。

モスクワ時代のイワン、まとめ

以上駆け足だが、モスクワにおけるイワンの思索を辿り、彼の思想の概略を見通せる地点に至ったように思われる。改めてモスクワにおけるイワン像のポイントを纏めておこう。

彼が残した思索の足跡とは、まずは「神と不死」を熱烈に求める「ロシアの小僧っ子」の足跡であり、見事な一直線をなすものである。だがよく見るとこの直線は「肯定と否定」「信と不信」という、全く相反する逆方向の足跡が刻む直線であり、そこには彼の思索における未熟さと矛盾・分裂の痕跡がクッキリと認められ、我々はそこに悪魔的意図的な「叛逆」、「否定」の痕を認めざるを得ない。決定的なことは、地上を覆う不条理、罪なき幼な子たちの涙に目を釘付けにされ、その涙を贖うべき存在を切に求める彼が、福音書のイエスと出会い、その十字架に示された「キリストの愛」に感動しながらも、彼自身はその「目撃者」に留まったまま、決して「実行的な愛」に踏み込むことはせず。悪魔の「否定の精

神」に自らを委ねてしまったことである。イエス・キリストが神を示す指を見つめながら、アリョーシャとは対照的に、イワンは神に目を向けようとはせず、またイエスに従って歩むこともなく、遂には自らを神だとしてしまったのだ。

「キリストの愛」に強く感動させられながらも、神をも「キリストの愛」をも斥け、「実行的な愛」に踏み出すことのなかったイワン——「大審問官」の劇詩とそれに続く「地質学的変動」の人神思想を検討してきた我々は、イワンが示すこの矛盾・分裂の姿が、弟アリョーシャと較べる時、この青年の認識の不徹底さから来るものであり、更には彼が宿す悪魔の「否定の精神」、あるいは自らを絶対者・「人神」とする「倨傲の精神」の産み出したものであると判断せざるを得ない。また彼の人神思想とは、人間と世界とその歴史に対する深い絶望と軽蔑と表裏一体にあることも忘れてはならないであろう。

最後に自らを神としたイワンが、その一方で感じていた恐るべき虚無感と恐怖感について、悪魔の証言に耳を傾けておこう。イワンの内なる悪魔は、「僕にはとても理解できない何か太古からの定め」に衝き動かされ、否定の役割を引き受け続けてきたと語り、その結果が如何に恐ろしいものであったかを次のように語るのである。

「僕は苦しんでいる、だが生きていない。僕は不定方程式のXだ。僕は何か人生の幻影のようなもので、全て始めも終わりもなくしてしまった。そして自分を何と呼ぶのか、遂には自分の名前まで忘れてしまった」(十一 9)

自分の名前まで忘れてしまうほどの存在感覚の喪失。恐らくこれが悪魔の「否定の精神」に身を委ね、神を否定し、イエスと「キリストの愛」を排斥したイワンが生きる現実だったのであろう。イワンは既にモスクワでユダの道を行っていたのだ。そして既にモスクワで、このユダ・イワンに対する「悪業への懲罰」も始まっていたのである。

ところで「目撃者」とは、苦学生としてのイワンがモスクワで生活の資を得るため、新聞に雑報記事売り込む仕事をしていた頃に用いていたペン・ネームである(一 3)。イワン自らが考案したこの名前が、図らずも彼自身の思索と生の在り方をそのまま映し出すという皮肉を彼は生きていたのだ。

このイワンの前にスメルジャコフを置く時、我々の眼前に改めて浮かび上がるのは、運命の理不尽と醜悪が彼の内に刻んだ闇の深さである。悪魔の「否定の精神」に身を委ね、自分の名前まで忘れてしまうほどの存在感覚の喪失に苦しむイワンに対して、第1章で見たように(「研究会便り(8) [3]」、いつの間にか自らに与えられた名前の醜悪さに苦しめられていたのがスメルジャコフだと言えよう。境遇の違いは措いて、人間と世界とその歴史に対する深い絶望と軽蔑という点で、スメルジャコフはイワンと同一線上に立つ異母兄弟なのだ。家畜追込町においてこの青年は、「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」を内に疼かせつつ、自らを一人闇の中に孤絶させ、そこから外の世界に白い眼を剥き、万人万物一切

に対して激しい呪詛の言葉を投げつけていたのである。

ドストエフスキイはこれら二人の異母兄弟を家畜追込町で出会わせ、深く交流させ、「父親殺し」へと向かわせ、そしてその先、更に何処に導こうとしているのか。

3. 帰郷、「父親殺し」、そして逃走

(1). 帰郷の目的

イワンの帰郷の目的は大きくは二つあったと考えられる。一つは、カチェリーナとの恋に何らかの決着をつけること(五三)、もう一つは「大審問官」に続く「地質学的変動」の劇詩において完成を見た人神思想、その真理性と現実性を故郷の家畜追込町で実証すること(十一九)、恐らくはこれら二つであろう。恋と思想実験。更にもう一つ付け加えるならば、待望の西欧行き(一三、五三)を前にしたイワンが、故郷に戻り父とも向き合い、自らの出自の確認を計ったということも考えられるであろう。

思想実験の破綻、「場違いな会合」の時系列的な位置

カチェリーナとの恋は措いて、帰郷後のイワンの足跡から判断すると、思想実験の方は具体的には自らの人神思想の宣布と、聖者ゾシマ長老との対決という二つの形で、着々と展開していったと考えられる。前者の人神思想の宣布については、「場違いな会合」において地主のミウソフが、イワンが町の上流階級の婦人たちの集まりで「地質学的変動」の思想を説いていたことを暴露する(二五、第二章⁵)。人神思想の宣布という点では、上流階級の婦人たちに対してよりも遥かに重要な意味を持つのは、スメルジャコフに対する伝授であろうが、これは後で改めて検討することにして、ここではまずイワンと聖者ゾシマ長老との対決について見ておこう。フォードルの暴露するところによれば、そもそも「場違いな会合」を設定したのがイワンだったのである(二八)。作品が始まってすぐの第二篇で、イワンの故郷における思想実験の恐らくは最大の目的であった長老との対決が行われ、しかもその実質的な失敗が、つまりは人神思想の持つ「虚偽と欺瞞」がゾシマ長老によって見抜かれるのだ。

忘れてならないことは、この「場違いな会合」の翌日、彼は料亭「みやこ」で、弟アリオシャとの対決をすることである。これが報告されるのは作品中盤の第五篇であるが、モスクワに帰る前日と前々日、イワンは聖者ゾシマ長老と、その弟子であり自らの弟であるアリオシャ二人に対し、相次いで自らの人神思想をぶつけ、その思想が含む矛盾、「虚偽と欺瞞」を完膚無き迄に白日の下に曝され、故郷の家畜追込町を去ってゆくのだ。しかも彼がモスクワに向かう車中にある夜とは、彼の秘かな願望を受け止めたスメルジャコフが父親フォードルの脳天を叩き割る夜であり、彼はこのことを承知して、自らの卑劣さの痛切な自覚と共に、モスクワに逃げ帰ってゆくのである。ドストエフスキイが取ったこの

作品構成は、前後が交錯した凝縮した時間展開という点で、緊張感に満ちたドラマチックなものではあるが、事柄の時系列的な把握の点で、読者を少なからず混乱させるものがある。我々は、モスクワにおけるイワンの思索が悪魔の「否定の精神」に支配され、「虚偽と欺瞞」を宿すものであったこと、そして帰郷後の彼の思想実験もまた、最終的に挫折の道を進んだのであること、この時系列的な流れをここで改めて確認した上で、「場違いな会合」に目を向ける必要があるだろう。さもないと春から夏の終わりにかけて故郷に滞在したイワンの言動について、「木を見て森を見ず」、我々はイワンという思想の巨大な迷宮に呑み込まれ、道に迷ってしまう危険が大きいであろう。

「場違いな会合」の場で、ゾシマ長老の洞察

イワンが故郷を去る二日前、ゾシマ長老の庵室で開かれた「場違いな会合」（第二篇）。この集まりのクライマックスは、フォードルの道化芝居を始めとして様々にあり、ここで我々読者は少なからず混乱させられるのであるが、まずはイワンとゾシマ長老との対決を第一に捉えるべきであろう。フォードルの暴露するところによれば、そもそもこの集まり自体を設定したのがイワンだったのである（二八）。つまりこの「場違いな会合」とは、イワンが故郷滞在の総決算を試みる場であり、ここでイワンはモスクワ以来育んだ思想を、更にまた故郷で宣布を計ってきたその思想を、いよいよ正面からゾシマ長老にぶつけるのだ。ここで我々は、今までの視線の延長線上から逸れることなく、「場違いな会合」においてイワンの未熟さと分裂を見抜いたゾシマ長老が、彼に対して如何なる言葉を発したかを見ておくことにしよう。

「場違いな会合」。ここで「教会裁判論」を巡りイワンが語る破門者論については、我々は既に前回スメルジャコフの棄教者論との関係で検討済みである（第2章⁴）。この破門者論こそ、イワンのモスクワ時代の思索の到達点たる「地質学的変動」のエッセンスであり、かつその思想の現実社会への応用編とも言え、彼はこれをゾシマ長老にぶつけるのだ。

この破門者論によってイワンは長老を論破し、所期の目的を達したのだろうか？ —— 前回確認したように、結論から言えば完全な敗北であった。イワンはゾシマ長老によってその思想の未熟さと不徹底、その綻びを完膚なきまでに見破られてしまったのである。ゾシマ長老の反応を再度、簡単に確認しておこう。

人間の罪を裁く主体は究極どこにあるのか。「教会裁判論」を巡り、自らの人神思想を潜ませつつ、イワンが展開した破門者論に対してゾシマ長老は、神は人間の良心に罪意識を介して臨むこと、罪人への厳然たる神の裁き、すなわち「悪業への懲罰^{カハラ}」が存在すること、それが「キリストの律法」であることを諄々と説き聴かせる。長老はイワンが、未だ神を知らずして神を論じ、神を天上に葬り去る「ロシアの小僧っ子」であることを見抜き、その思索の未熟さと不徹底、その思索が隠し持つ「虚偽と欺瞞」を、アリョーシャに先だつて見抜いたのだ。

人間の罪を究極において裁き司る神について知らぬまま、滔々と罪と裁きについて論じ、

神からもイエス・キリストからも罪からも解き放たれた人神の可能性を見つめるイワン。ゾシマ長老はその思索の観念性と認識の不徹底を見抜いたのだ。つまり長老はイワンが、「神と不死」の問題でなお「肯定と否定」の間を揺れ動く未熟な思想青年でしかないこと、神の否定さえ完全にはなしえていないことを見て取ったのである。

だが最後に長老はイワンに対し、彼が「肯定と否定」の矛盾・分裂の苦しみの内にいることへの深い理解を示し、やがて彼がそこから抜け出て、最終的にその「崇高な心」が「肯定」の答えを見出すことへの励ましの言葉を贈る。その際長老はパウロの言葉を引き、イワンが「高き」にいます神を、そして「天の住まい」を求めることへの励ましを与え、また彼が神から祝福を与えられることへの祈りをも加えるのである。

「肯定的な方向に解決されない限り、決して否定的な方向にも解決されません。あなたご自身がご自分の心のこのような特性をご存知でしょう。そしてそこにこそ、あなたの心の苦しみの全てがあるのです。だがこのような苦しみを苦しむことの出来る崇高な心をあなたに授けて下さったことで、創造主に感謝することです。

《高きを惟い、高きを求めよ。

《我らが住まいは天にあり》（コロサイ書三2,1、ピリピ書三20）

神があなたの心の解決を、あなたがまだ地上にある内にあなたにお与えなさるよう。そして神がどうかあなたの道を祝福なさいますように！」（二6）

ここにいるのは、ゾシマ長老に重ねられた作者ドストエフスキ自身であると考えられるべきであろう。作品冒頭近くの第二篇にして既にドストエフスキは、モスクワ以来のイワンが「神と不死」の問題で「肯定と否定」、「信と不信」の間を揺れ動く未熟な思想青年であることを暴露し、この青年がこの先辿るであろう茨の道、つまり彼の思想実験の破綻と「悪業への懲罰」を宣言するのだ。そればかりかドストエフスキはゾシマ長老に、「高きを求めよ」というパウロの言葉と共に、更にイワンの挫折の先にある神の赦しと愛についての確信を表明させ、預言をさせたとも言えるであろう。これは「観照者」としてのスメルジャコフ像の提示と同じく、イワンのドラマ全体を見据えた作者の、我々読者に対する作品構成の開示であるとも考えられよう。更に我々はアリョーシャもこの場に臨席していること、そして兄イワンがこれから辿るであろう試練の道を心に収めることも、心に留めておく必要があるだろう。兄イワンの、そして同じく兄スメルジャコフの「重い病」と苦難を冷静に見つめ、そして彼らに寄り添い続けるのがアリョーシャなのだ（第3章⁶、第4章、第6章⁵等々）。

父親との対決

ゾシマ長老との対決に加えて父親との対決、あるいは「父親殺し」。イワンの帰郷の目的として、後者について筆者が直接記すことはなく、我々に勝手な想像は許されない。だがイ

ワンが帰郷の時点で、既に実際の「父親殺し」まで念頭に置いていたかどうかは疑問とすべきであろう。「父親殺し」は帰郷後イワンが、スメルジャコフと共に踏み込んでゆく新たな悪魔の道と考えるのが自然であろう。

イワンは早くも十歳の頃から、自分が「他人の情けで生きている」ことを承知し、故郷の父が「その名前を口にすることすら恥ずかしい人物」であることも知り、大学生活の前半で苦学生としての生活を強いられても、父親に手紙一つ出そうとしなかったとされる(一三)。独立不羈の精神の持ち主がイワンであり、彼がモスクワ時代から父親への復讐心を育み、いつの日か父親殺害を果たそうと心に期していたとは考えられない。イワンが帰郷後、父フォードルの家に住むことになったことについても、そこに何らかの底意があったと考える必要はないであろう。アリョーシャもまた帰郷後は、父フォードルの許に身を寄せているのだ。母の遺産を巡って父と骨肉の争いを繰り広げる長男のドミートリイは別として、家長フォードルに息子たちを家に迎え入れる度量がなかったと考える必要もないであろう。帰郷時のイワンの内にあったのは、先にも確認したように、まずはカチェリーナの存在であり、また故郷の町で「地質学的変動」の思想の真贋を試みようとする心、その高揚感であったと考えられる。父親フォードルについては、大学を卒業して新たに西欧に旅立つ前に一度故郷に戻り、自らの出自をこの目で確認しておこう、母親の死と共に幼い自分を「忘れ去り、棄て去った」父親の本性を突き止めてみようとの、冷やかな「目撃者」の心程度であったと考えるのが妥当なところではないだろうか。

軽蔑から嫌悪感、そして殺意へ

だがいよいよ間近に見る父フォードル。イワンはこの父が、ひたすら金と酒と女に生きる生命力に溢れた「好色漢」であり、「卑劣漢」であり、また「道化」であることを目の当たりにする。「親父は七十になるまで[生の]盃から口を放すことはないだろう。それどころか八十までもと夢見ているのだ。これは自分でも言っていたことだ」(五三)。帰郷以来父親を間近で観察していたイワンの、アリョーシャへの報告である。帰郷と共に「だらしのない子豚も同然」(十一四)の父親を目の当たりにするにつけ、イワンの内では父親を冷ややかに見つめる目が間もなく軽蔑の目へと転じ、遂には殺意をも含んだ嫌悪感にまで高まっていったことは否定出来ないであろう。(フォードルという存在の「桁外れ」な独自性については、「研究会便り(4)」を参照)

このような推測を我々に可能にさせるのは、スメルジャコフが棄教者論を説いた後(第二章⁴)、フォードルによって部屋から追い出された場面に続く二つの章である(三八・九)。ここではフォードルが、息子イワンとアリョーシャを相手に、自らの信仰論に続いて「好色漢」ならでは女性観を露骨に展開する場面から、家に飛び込んできたドミートリイによって殴り倒される修羅場に至るまで、彼の内面を浮き彫りにする様々なエピソードが描き出されてゆく。それらの中からフォードルの二人目の妻、イワンとアリョーシャ二人の母ソフィアとの間に起きた恐るべき一つのエピソード、「事件」を見ておこう(三八)。

フォードルがイワンとアリョーシャに向かい、「神はあるのか、ないのか?」、「不死はあるのか、ないのか?」と畳みかけるように問いかけた後のことだ。続けてフォードルは、二人の息子たちに自分の女性遍歴を誇り、名うての「好色漢」ならではの女性観を披露する。その延長線上である。話題は二人の亡き母ソフィアに移される。フォードルは夫婦の間だけの秘め事を明かし、継いで新妻ソフィアの信仰心の篤さに嫉妬した彼が、聖母マリア祭の日、妻が祈る聖母像に唾を吐きかけたという衝撃的なエピソードを披露する。この話を聞いていたアリョーシャは、「狐憑き^{クツクシカ}」とも呼ばれた「宗教的痴愚^{ユローヂヴァキ}」の母と全く同じ反応を示し始める。叫び声を上げたかと思うと両手を打ち鳴らし、顔を覆ってなぎ倒されたように椅子に倒れ掛かり、突然声にならぬ涙にむせびつつ、ヒステリー発作しながらに身体を痙攣させ始めたのである。彼もまた母親譲りの「宗教的痴愚^{ユローヂヴァキ}」だったのだ。アリョーシャのこの反応については、また別の機会に考察しよう。

仰天したフォードルはイワンに、口に水を含んでアリョーシャに吹きかけてやるようにと呟く。「これは、自分の母親のことで、自分の母親のことでな・・・」。説明を試みようとして必死のフォードルはこの時、アリョーシャの母ソフィアがイワンの母でもあったことをすっかり忘れてしまっていたのだ。ギラリと目を閃かせたイワンから、怒りと侮辱に満ちた叫びが迸り出る。「しかし僕の母親もまた、彼の母親と同じだったと思いますかね、どうですか?」。春の帰郷から夏の終わりまで、恐らくイワンはこのような父を少なからず目撃していたのであろう。

この直後のことだ。フォードルは家に飛び込んできたドミートリイによって殴り倒され、血まみれになる。この大騒動が収まった後、イワンはアリョーシャに向かい冷然と言い放つ。「二匹の毒蛇が喰い合っているのだ」。更に彼は、自分が父親の死を「期待する権利を保留する」とまで宣言するのである(三九)。後にアリョーシャはイワンに向かい、自分がこの時兄の内に、父の死を望む心の存在を感じたと告白するであろう(十一六)。また当のフォードル自身もアリョーシャに向かい、スメルジャコフが家族全員に対して抱く敵意を指摘し、次いで息子イワンに対する恐怖心を再度表明することは、前回見た通りである(第二章^[6])。「俺はイワンが怖い。あいつ[ドミートリイ]などよりもイワンの方が怖いのだ。怖くないのはお前一人だけだ・・・」(三九、四二)。カラマーゾフ家において、父親の死は決して遙か遠い未来の話ではなくなっていたのである。

(2). スメルジャコフとの出会い

「一切が許されている」

家畜追込町への帰郷。前回見たように(第二章^[5]・^[6])、心逸るイワンをまず惹き付けたのは彼の異母兄弟、カラマーゾフ家の料理係の下男として働くスメルジャコフであった。筆者はイワンが直ちにこの「一風変わった」人物に目を止め、大きな関心を抱き、彼が自分に近づいて話をするよう自ら仕向けさせたと記す(五六)。グレゴリーとフォードルに続いて、スメルジャコフに対する新たな「寺子屋」教育が開始されるのだ。イワンとの永遠

の別れの直前、スメルジャコフが回想する二人の「寺子屋」時代の雰囲気、改めて確認しておこう。

「[自分が父親のフォードル殺しに至ったのは]《一切が許されている》と考えたからです。このことは本当にあなたが教えて下さったのですよ。あなたはあの頃色々とお話をして下さいました。というのも、もし永遠の神がいないならば、いかなる善行もありはしない、そもそも善行など何の必要もないのだと。あなたは本気でした。それゆえ私もそう考えたのです」(十一8)

スメルジャコフの孤独の中に突如現れたのがイワンであった。「一切が許されている」。人間を縛るものなど何もない。良心もそして神さえも。イワンの「地質学的変動」の人神思想が、青天の霹靂のようにスメルジャコフの心を打ったことは想像に難くない。イワンの人間への絶望と軽蔑も、スメルジャコフの心に強く響くものがあつたに違いない。「あなたは本気でした。それゆえ私もそう考えたのです」。だが運命に対する怒りと呪いと復讐心に憑かれたスメルジャコフの心の中で、この時具体的に何が起こったのか、また何時如何にして彼は「父親殺し」に向けて動き出したのか、そもそも彼に対する「寺子屋」教育はどの程度の期間続いたのかについても、筆者が直接記すことは何もない。捉え難いこのプロセスを追う上で、最大限に注意すべきは、筆者が「父親殺し」に結晶してゆくスメルジャコフの心を、専らイワンの心に映し出された形で、それも極めて曖昧に描いてゆくことだ。これは前回確認したところであり、記述も前回と重なる所が多いが(「研究会便り(9) [6]」、まずは改めてこのことを確認しておこう。

出会いの熱気の変質

出会い当初の感動と熱気。そしてカラマーゾフ家の新たな「寺子屋」における人神思想の伝授。だがやがてイワンは、スメルジャコフが示す思考の「支離滅裂さ」というよりは、その思考の「落ち着きのなさ」に突き当たる。筆者は、彼が投げかける「何か遠回して、明らかに考え抜かれた質問」の捉え難さが、イワンをますます苛立たせていったと記す。またイワンはこの異母兄弟が駆り立てられている「執拗な不安」に目を見張らされ、その奥に蠢く「測り知れぬ自尊心」に、更には「傷ついた自尊心」の存在にも気づくに至り、遂には「嫌悪感」を感じさせられるまでに至ったと記される(五6)。

イワンが突き当たったのは、スメルジャコフの内深くに潜む闇、具体的には「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」であり、更に言い換えれば、自らが投げ込まれた理不尽で醜悪な運命に対する激しい怒りと呪いと復讐心だったと考えてよいであろう。繰り返して見えてきたように、それは父親フォードルばかりか、育ての親グレゴリーイ、イワンも含む異母兄弟たちに対しても、そして祖国とロシア民衆と外国人に対しても、更にはイエスと神に対してさえも向けられる痛烈な憎悪と叛逆の心であり、万人万物一切に対する呪いと復讐心だ

ったのだ。フォードル殺しとは、何よりもまずこのスメルジャコフの内なる闇、その「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」から生まれ出た運命への復讐劇であったと考えるのが自然であろう。彼はイワンとの出会いを契機として、またグルーシェニカを巡る父親と長兄との争いの激化に乗じて、一気にその復讐劇の実行に乗り出し、フォードルの脳天目がけて鉄槌を振り下ろすのだ。

かくしてイワンがスメルジャコフの内に蠢く「執拗な不安」に驚かされ、遂にはその「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」に行き当たり、「嫌悪感」を抱かされた頃には、既にスメルジャコフ自身は、先に見たイワンの父親に対する嫌悪感あるいは殺意を敏感に察知し(十一7)、この「前衛的肉弾」の内なる手には「斧」が握られていたと考えてよいであろう。群を抜くスメルジャコフの知力は、既に我々には周知のものであるが、いざ「父親殺し」の具体的な実行へと向けて歩み始めるや、イワンを巻き込むべく、またドミートリイを利用すべく、彼が積み上げる計画の周到さと綿密さは驚くべきものである(十一8)。イリューション少年を巻き込んでの懼るべき「ジューチカ事件」(十4、「研究会便り(11) [5]」)は、一か月後の父親殺しの成就に向けた、心逸る序曲だったのであろう。

(3). 別れゆく道

主従関係の逆転

さて父親殺害の経緯を辿る中で、我々読者が突き当たり困惑させられる、しかし避けて通ることの許されない一つの大きな壁、あるいは謎がある。それは裁判の直前まで、イワンにはスメルジャコフが仕組んだ殺人劇の全貌も細部も、それへの自らの加担の程度も殆ど何も把握し切れぬままにしているように見えるということである(十一6、7、8)。モスクワ帰りの若旦那イワンの「一切が許されている」とする人神思想は、運命への怨念を胸に秘める下男スメルジャコフに、その復讐劇への理論的根拠を与え、またイワン自身の父親への嫌悪感の高まりと共に、「父親殺し」に向けてこの「前衛的肉弾」の背を押したことは否定出来ないであろう。だが若旦那の秘かな願望を忖度した下男がいざ実行に向けて始動を始めるや、奇妙なことにイワンの心には怯えと躊躇が生じ、あわよくば逃げ出そうとしているかのような印象さえ与えるようになるのだ。そればかりかイワンは、そもそも自分の内に存在した父親への殺意さえ、確かなものかどうか曖昧になってしまったかのようにも見えるのだ。

下男が「前衛的肉弾」として一人先を歩み、若旦那は遠く置き去りにされる。「蛇に睨まれた蛙」から、「蛙に睨まれた蛇」へ。主従関係の逆転。これはこれで、この作品のドラマ展開に向ける視点として、少なからず興味深いものである。だがこの「蛙に睨まれた蛇」という視点の先に見えてくるものは、なんとも惨めで滑稽なイワン像でしかない。モスクワより人神思想を携え颯爽と登場した若旦那イワンが、やがて運命への復讐を謀る下男スメルジャコフの策略に絡め捕られ、「父親殺し」に引きずり込まれ、その決行が視野の内に入り始めるや怯え切り、「卑劣漢」の意識を土産にモスクワに逃げ帰ってゆく——このイ

ワンの姿は、現実のものではあるとは言え、余りにも惨めで滑稽なものである。我々はイワンのこの怯え切った姿の奥に、もう一つのイワンの姿があることを見落としてはならない。主従関係の逆転、この視点はイワン像の半面であり、もう一つの視点を加えて初めて、イワンの全体像が浮かび上がると考えるべきであろう。

怯えるイワンと高揚するイワン

真夜中、階段の上から息を潜め父の様子を窺うイワン。本章の冒頭で見たイワンの姿。ここに我々はただ恐怖感に捕らわれ、怯え躊躇するだけのイワンを見てはならない。ここには同時に、いよいよ「父親殺し」という懼るべき血の「一線の踏み越え」に乗り出そうとするイワン、密かに興奮し身震いするイワンがいることも読み取るべきであろう。

先に見たように筆者は、イワンが生涯自分の行為を「生涯で最も卑劣な行為」と考えていたと記し、更に彼の心を説明することは難しいとも記す。そのわけは、それが「思考の流れ」というよりは、「桁外れの興奮」がもたらした「何か非常に漠然としたもの」であったからだとする。つまりこのイワンの姿とは、スメルジャコフの軍門に下った哀れな若旦那イワンの姿であると同時に、自らの人神思想の真実性と現実性を確証すべく、下男スメルジャコフを「前衛的肉弾」として、いよいよ父親を殺害しようとして「桁外れの興奮」の内にある若き思想家の姿でもあったのだ。モスクワのイワンの思索の歩みを踏まえる時、そしてまた彼の帰郷の目的について思い合わせる時、我々がこのイワンの内に見出すのは、「人類七千年の習慣」によって縛られた「良心」を一気になぐり棄てようとする青年の身震いであり、「一切が許されている」とする自らの思想の真実性を、実際に血の一線を踏み越えることによって証することへの悪魔的高揚感と、同時にその心の底から吹き寄せてくる懼るべき恐怖感でもあったと考えられるのである。

イワンの最深奥にあるもの

我々はこの高揚感と恐怖感の更に向こうで、イワンが触れていたものについても考える必要があるだろう。彼が天上に神を追放したこと、それに続いてイエスと「キリストの愛」を排斥したこと、これらのことから吹き寄せてくる懼るべき「裁き」の感覚である。つまり「神殺し」と「イエス磔殺」と、そして新たな「父親殺し」。これら三重の一線の踏み越えが「人神」イワンに与えたものとは、一方では測り知れぬ悪魔的高揚感であったと同時に、他方ではおよそ耐え難い、超越的恐怖感とも呼ぶべき裁きの感覚でもあったと考えられるのだ。真夜中、息を殺して階下の父の動静を窺うイワンの内にあつたものとは、これら相反する両極的感情であったと考えて初めて、彼の並外れた怯えと躊躇の奥行きは真に理解され、また筆者が「桁外れの興奮」がもたらした「何か非常に漠然としたもの」と呼ぶものも、更には彼がスメルジャコフとの別れ際に出し抜けに発した「どうにも説明がつかぬ類いの」あの高笑いも納得がゆくものとなるであろう。

法廷のイワン

イワンが触れていたものの奥行きと懼ろしさを知らぬために、ここで法廷でのイワンにも目を向けておこう。前夜スメルジャコフから受け取った三千ルーブリの札束を取り出して見せた後、イワンは裁判長に向かって言う。「父を殺したのは彼 [スメルジャコフ] であって、兄 [ドミートリイ] ではありません。彼が殺し、私が彼に殺すよう教唆したのです……誰が父親の死を望まないでしょうか? ……」(十二5)。裁判長が思わず口にする。「あなたは正気なんですか、どうなんです?」。これに対して返されたのは驚くべき答えであった。「正気かどうかとお尋ねですが……実は[僕は]卑劣なほどに正気ですよ。あなたと同じように、そしてまたここにいる……豚どもと同じようにね」。彼は聴衆の方に振り返る。「[奴らは] 父親を殺しておきながら、驚いたふりをしていやがるんだ」。凶暴な侮辱感に捕らわれて、イワンは歯ぎしりをしたとされる。「お互いにしらを切りやがって。嘘つき野郎らが! 皆が父親の死を望んでいるんだ。毒蛇が互いに喰い合っているんだ……父親殺しが無いとなると、連中は皆腹を立てブーブー言いながら帰ってゆくんだ……[連中が望むものとは] 見世物なんだ! 《パンと見世物!》なんだよ。だが、こういう俺様とてご立派なものですよ! 水はありますか、僕に飲ませて下さい、後生です!」(十二5)。

鬼気迫る場面だ。ここにいるのは人格解体の崖を真っ逆さまに転げ落ちつつあるイワン、その意識さえ解体させつつあるイワンであり、同時に「卑劣なほどに正気」なままに自らの心の内を、そして全人間の心の内を暴露し糾弾するイワンである。作者ドストエフスキイがこのイワンに直面させているもの、それは目の前の法廷の裁判長や聴衆だけではない。同時に、否、それよりもむしろ彼らの向こうにあるもう一つの法廷であり、そこに座す「裁きの神」と考えるべきであろう。彼が自分こそ「父親殺し」の正犯であることを告白し、かつ人間全てが「父親殺しを望んでいる」ことを暴露したのは、正にこの「裁きの神」に対してなのだ。この視点から捉えない限り、ここでイワンが語る言葉の全ては、決してその奥行きと懼ろしさが十分には明らかにされず、またこの青年が直面していた問題の広がりも奥行も十分には理解されずに終わるのである。

「裁判」の前夜、イワンが直面させられたもう一つの「裁き」、そして「裁きの神」との出会いこそ、本章の後半が扱うテーマに他ならない (4・5・6)。

(4). 逃走

「生涯で最も卑劣な行為」の先

話を「父親殺し」に戻そう。「一切が許されている」。既に見たように、この観念の刃はいつの間にかイワンの手を離れ、彼の「前衛的肉弾」スメルジャコフが手にする武器となったのであった。更にこれは密かに少年イリュージンにも手渡され、仔犬のヂューチカがパンの塊と共に呑み込まれるピンに転じ (次回第4章、「研究会便り (11)」、遂にはスメルジャコフ自身がフォードルの脳天めがけて振り下ろす文鎮へと変じてゆくのだ。スメルジャコフによるフォードル殺害の決行は、イワンの高揚感が遂に恐怖感によって追い

払われ、「卑劣漢」の痛切な自覚と共にモスクワに逃げ帰った日の夜のことである。

モスクワから家畜追込町に呼び戻されたイワンは、この後スメルジャコフとの三度にわたる対決を繰り返す。そしてイワンが自らの罪を最終的かつ決定的に自覚させられるまでの二か月とは、彼が神との出会いを果たすまでの二か月であり、またスメルジャコフを死に追いやる二か月であり、そしてまた法廷での自白を果たした後に、彼自身が「死の床」に臥すまでの二か月でもある。書かれずして終わったこの作品の後篇において、恐らくは「死の床」から再び立ち上がるであろうイワンを待ち受けるのは、「神殺し」と「イエス磔殺」と「父親殺し」、そしてこれから見る「兄弟殺し」という何重もの十字架を負ったゴルゴタへの道、想像を絶する過酷な生であることが予想される。だが我々は作者ドストエフスキイが、作品の終わり近くでドミートリイに、イワンの未来について次のような予言をさせていることも見ておこう。

「聞け、兄弟イワンは全員を超える。生きるべきは彼で、俺たちではない。彼は回復する」(エピローグ2)

『カラマーゾフの兄弟』の前篇を書き終えてから(1879年11月初旬)間もなくして、作者ドストエフスキイはこの世を去る(1881年1月28日)。イワンの新たな生を描き、そして生きることは、我々読者に託されたのである。

ところでイワンが「死の床」に臥すまでの二か月とは、同時にスメルジャコフが自らの犯した罪と対峙し、その罪を介して神と向き合い、遂には自らの命を「絶滅させる」までの二か月でもある。ここに展開するのは、神の裁きが「父親殺し」の兄弟二人の良心に臨む、懼るべき「悪業への懲罰」のドラマであり、そこには二人の苦悩を見つめ寄り添うアリョーシャの姿も認められるであろう。

以下の⁴では、イワンが最終的な罪の自覚と神との出会いに至るプロセスを見据えつつ、同時に第一篇からの主要テーマであるスメルジャコフにも的を絞り、この「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」を内に疼かせる青年が運命への復讐を遂げた後、果たして何と出会い、如何なる終局に至るのかも確認してゆこう。この問題は第1回目から取り上げ、最終回の第6章まで考察が続けられる本論最大のテーマであり、今回はその考察のための下地作りの作業でもある(拙著『カラマーゾフの兄弟論』後篇Ⅶも参照)。

4. 「悪業への懲罰」 — 三度の対決 —

「殺したる後^{こゝろ}ゲヘナ^{のち}に投げ入る^な權威^{いる}あるもの^{ちから}」

イワンをたじろがせる冷静さを以って、父親殺しに向けて悪魔的とも言うべき周到で綿

密な準備を重ねたスメルジャコフ。だが運命への呪詛と復讐の心に憑かれた彼もまた、実際に血の「一線を踏み越える」ことは容易ではなかった。彼自身フョードルの殺害自体は、ドミートリイの手になることを期待していたのだ。この長男は酒場で酔いに任せて父親殺しを公言していたのである。その計算が外れたことが判明するや、直ちに彼は決断する。「正にこの場で、一切のけりをつけてしまうのだ」(十一8)—— 決断の時の心の震え。フョードルの部屋に踏み込むや、襲われた恐怖と足のすくみ。父の脳天に文鎮を三度振り下ろした時の感触。再び癲癩の仮病を装うべくベッドに戻り、横になって捕われた恐怖。二か月が経ち、これらをイワンに告げる時でさえ、スメルジャコフは「興奮し、苦しげに息をつき、その顔には汗が浮かんでいた」と記される(同上)。『罪と罰』のラスコーリニコフ以来、血の一線を踏み越えた者たちが追い込まれたパニックを、スメルジャコフもまた免れることは出来なかったのだ。いざ父親が殺されたのを知るや、以前の悪魔的高揚感是完全に吹き飛び、底知れぬ恐怖感に脅かされつつも、最終的な罪の自覚からはなお遠くをさまようイワンとは対照的に、実行犯スメルジャコフに対して「活ける神の御手」(ヘブライ人への手紙十31、第6章⁴)は、直ちに懼るべき裁きとして臨んだのである。

スメルジャコフが捕えられた懼れ。それを最も的確に言い表すものは、ルカ福音書が伝えるイエスの次の言葉を措いて他にないであろう。

「わが友たる汝らに告ぐ、身を殺して後に何をも為し得ぬ者どもを懼れるな。懼るべきものを汝らに示さん、殺したる後ゲヘナに投げ入る権威あるものを懼れよ。われ汝らに告ぐ、げに之を懼れよ」(ルカ十二4-5)。

ラスコーリニコフと同じく、また若きゾシマを訪れた「謎の客」ミハイルと同じく(六2D、第6章⁴)、ドストエフスキイはスメルジャコフをもイワンをも共に、父フョードルの「身を殺して後」「ゲヘナに投げ入る権威あるもの」の前に立たせたのだ。父親殺害後の二人を描くドストエフスキイの筆は、それぞれのタッチは全く異なるものでありつつも、一貫してこの「活ける神の御手」の裁きの懼ろしさ、あるいはゾシマ長老がイワンに語る「悪業への懲罰」(二5)に向けられる。『カラマーゾフの兄弟』後半のクライマックスたる二人の対決を、この「懼るべきもの」現前のドラマから目を逸らせて追うことは、裁きの神から罪人に吹き寄せる超越的恐怖感の言語化という、『罪と罰』以来のドストエフスキイの刻苦苦闘から目を逸らすことに他ならない。

「ゲヘナ」のドラマ

三回にわたって報告されるイワンとスメルジャコフとの対決。それらは二人の異母兄弟によるそれぞれの罪との対峙の記録であり、またそれぞれの「ゲヘナ」における神との出会いの記録である。だがドストエフスキイの筆はラスコーリニコフの場合から一貫して、血の一線を踏み越えた人間に臨む「活ける神の御手」を、目に見える至高の力や栄光によ

って描き出すような安易で画一的な道を取ることはない。罪人たちに対する神の裁き、「悪業への懲罰」は、それぞれの罪人に即して、まずは彼らの良心に臨む恐怖や慄きや憂愁などの原初的感覚・感情として具体的に刻まれてゆく。このことを念頭に置き、以下でイワンとスメルジャコフ二人の三度の対決を確認してゆこう。それらは既に第1章でも概観し(2)、最終回でも検討するため(第6章4)、ここで徒に細部に立ち入ることは避けよう。我々がまず光を当てるべきは、父親殺しの兄弟二人の「裁きの神」との出会いの過程であり、また既にかけて離れていた二人の心が、血の一線の踏み越えの後、如何に一層遠く離れてゆき、異なったそれぞれの道を歩むに至るかの過程である。それらの検討を介し本論が目指すのはまずはイワンの理解と、次いでスメルジャコフという存在の全的な理解である。

(1). イワンの一度目のスメルジャコフ訪問

「正にこの神様」

モスクワに帰ったイワンはその四日後、父の死の知らせを受け取るや故郷に舞い戻り、その日の内に病院を訪れる。彼が目にしたスメルジャコフは、父親殺害のパニックの中で真正の癲癇発作に襲われ、意識不明のまま病院に運び込まれ、今もなお肉体はこの上なく衰弱していた。だが彼の意識は明晰であり、イワンから発される今更ながら的を外れな問いを逸らす知力も論証ぶりも、病人とは思われぬ切れ味を示すのであった。既に逆転していた力関係は変わることなく、対決は完全にイワンの敗北で終わる。

この対決において注目すべきは、スメルジャコフが次のような形で神の存在を口にする
ことである。

「今だって、この私たちの話を聞いている者など誰もいません、正にこの神様
以外には」(十一6)

会話の流れからすれば、これは取るに足らぬ言表でしかないと言えよう。彼は更にもう一度、些細な文脈で、神の名を口にするのだ。そもそも聖書に通曉し、信の人グレゴリーイを手玉に取り、フォードルからは「宗教的詭弁家」とも呼ばれるスメルジャコフが(第2章4)、神の名を口にすること自体何ら珍しいことではないだろう。そうでなくともスメルジャコフの言葉遣いは舌足らずで、文法的にも不正確なものである。どこまでこれを正面から受け取るべきか、容易には判断がつかかねるのだ。とは言え「正にこの神様」という表現には、聴き捨ててしまい兼ねるものがある。「正に」という強調語を加えた「この」という限定詞で、やはりスメルジャコフは真剣に「神様」のことを指しているのではないか。彼が身近に神の気配を感じていたと判断できる材料は他に直接見当たらず、イワンもこの言葉に何の反応も示さない。例によって筆者の説明は何もない。我々にはこれ以上の立ち入った推察も判断も不可能である。

だがスメルジャコフの奇妙な表現について、もう少しこだわっておこう。つい今我々は、

フョードル殺害直後のスメルジャコフが襲われた恐怖^{パニック}について、それが血の一線を踏み越えた人間が放り込まれる懼るべき「ゲヘナ」の恐怖であり、ドストエフスキイ文学においてこの恐怖とは、犯罪者の良心に臨む神の裁き、ゾシマ長老の言う「悪業への懲罰」の表徴に他ならないことを確認した。わずか一週間前にフョードルの脳天を叩き割ったばかりのスメルジャコフから、しかも未だその衝撃がもたらした真正の癲癇発作の影響から逃れられずにいる彼の内から、この恐怖が消え去ってしまったということがあり得ようか。ちなみに先に見た、父親殺しの際に襲われた恐怖に関する彼の回想は、イワンとの三度目で最後の対決の際、しかも彼の死の直前の回想である。彼は最後の最後まで、血の一線を踏み越えたことからくる懼るべき恐怖感に脅かされていたのだ。この殺人者は病院で意識を回復した後、その病床において「正にこの神様」の存在を感じ始めていた、あるいは既に何らかの形で「この神様」と対話を交わしていたと考えても無理はないであろう。事実これから見てゆくように、作者ドストエフスキイは父親殺害後のスメルジャコフとイワンを、罪意識の自覚と神との出会いへと逃げ場なく追い込んでゆく、その情報も我々読者に少なからず提供するであろう。我々もこの奇妙な表現が指すもの、それが持つ意味を、二人の対決を二回目三回目と追ってゆくことから、無理なく明らかにしてゆこう。

「^{ドープリエ・リューヂ}親切な人たち」

さてイワンの一度目の訪問においても一つ注目すべきことは、病床のスメルジャコフを訪れる人が少なからずいたと記されることだ。彼はまずグレゴリーイの妻マルファが「今まで通りの親切さで、必要なことなら万事につけ私を助けてくれます」と語り、また後に育ての親二人についてこうも語るだろう。「あの人たちは、私が正に生れ落ちてから常に優しくしてくれたのです」（十一8）。スメルジャコフは自分に注がれ続けた二人の愛情を十分に承知していたのだ(第1章²)。作者は続けて、病院に「毎日のように訪ねてくれる」「親切な人々」についても記す(十一6)。それらが具体的に誰を指すのかは明らかでない。そこに「婚約者」のマリアとその母が入ることは言うまでもないであろう。第1章において我々はそこにアリョーシャも加えたのだが、「親切な人」「実行的な愛」の人としてのアリョーシャについては次の(2)で、また第4章や第6章(「研究会便り(11)・(13)」)でも繰り返し考えよう。「罪なくして涙する幼な子」の極たる存在スメルジャコフと、「親切な人々」や「実行的な愛」の人アリョーシャ。この両極の存在こそ『カラマーゾフの兄弟』の中核をなす対立軸であり問題軸であることは、これから最終章にかけてますます前面に強く浮かび上がってくるであろう。

(2). イワンの二度目のスメルジャコフ訪問

婚約者マリアの許で、アリョーシャの影

最初の訪問から一カ月ほどが経ち、次にイワンが訪れた時のスメルジャコフは、第1章で見たように^[2]、マリア母娘によって病院から二人の新居に引き取られ、マリアの「婚

約者」として手厚く庇護されていた。マリアとスメルジャコフとが、立て続けに起こったゾシマ長老の死とフォードル殺害事件の騒動の只中で、何時如何にして「婚約」にまで至ったのか。また赤貧の極にあった母娘が如何にして「婚約者」を、古いとはいえ新たな住まいに引き取り、その世話まですることが出来たのか。更にスメルジャコフを深い愛情を以って育ててきたマルファとグレゴリーは、彼が病院を出て自分たちの許には戻らず、マリア母娘の新居にその婚約者として引き取られてゆくことについて、果たして如何なる反応をしたのか。二人は果たして納得したのか否か。これらの経緯を筆者は一切記さない。読者には容易に理解しかねる、余りにも急激かつ尋常ならざる状況の変化である。

これも第1章で言及したことだが、我々はこの事実の背後には、「実行的な愛」の人アリオージャの存在があったものと考えたい。そう考えることで、上に挙げた疑問や問いの殆ど全ては氷解するであろう。この問題については最終回の第6章〔5〕で改めて取り上げ、そのための大きな下準備として、次回第4章ではアリオージャの「実行的な愛」を主要テーマとして取り上げよう。ここでは暫く、アリオージャとスメルジャコフとマリアの関係について考えておくことにしたい。あの「くしゃみ」事件以来の問題である。

「父親殺し」の犯人について、アリオージャはどう考えていたのであろうか。筆者が再三記すことは、この青年が兄ドミートリイの言葉と、その言葉を発した時の兄の顔の表情とを信じ、父フォードル殺害の実行犯がスメルジャコフであることを一貫して確信し疑わなかったという事実である(十一6、十二4、エピローグ3)。「顔」を信じる。この青年の思考と行動の土台となるものとは、「神とその真理」に対する深い信と愛であり、そこに立つ直観力と洞察力なのだ。このアリオージャがスメルジャコフを父殺害の実行犯だと確信していたことと、彼がマリア母娘を支え、彼女たちとスメルジャコフとの新しい生活の影の協力者となったこととは、決して矛盾することではないだろう。そしてまたアリオージャがスメルジャコフを「毎日のように訪ねてくれる」「親切な人々」の一人であり、彼がこの不幸な異母兄弟のために可能な限り手を尽くそうとしたとしても何ら不思議なことではないだろう。更にはアリオージャが直接、この異母兄弟との間で「父親殺し」の罪について、更には神について語り合おうと試みたことも大いにあり得ることであり、むしろそうでないと考える方が困難であろう。尤もこれ以降見てゆくように、父親殺害後「悪業への懲罰」の現前に曝され、新たな危機の中に放り込まれたスメルジャコフが、アリオージャとの面会を拒絶した可能性も大だと考えるべきであろう。

改めて思い起こすべきは、マリアとの逢瀬の場でスメルジャコフが自らの出生と運命を呪って発したあの言葉だ。「この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかったです」。これをアリオージャは立ち聞きしてしまい、「くしゃみ」と共に登場したことも、第1章で見た通りである〔5〕。異母兄弟であり下男であるスメルジャコフの心の奥深くに潜む闇、自らの運命に対する怒りと憎悪、そして悲しみと呪いをイエスに向かって投げつける兄スメルジャコフを知ったアリオージャが、フォードル殺害後の彼を「毎日のように訪ねてくれる」「親切な人々」の一人となったとし

でも何らおかしくはないのだ。

ゾシマの遺訓、「実行的な愛」

「最も罪深い人間をこそ、誰よりも愛するのだ」(一五)。これはアリョーシャの師ゾシマ長老が死に至るまで一貫して強調した、福音書のイエスに土台を置く長老の信仰のエッセンスである(マルコ二17)。アリョーシャが「父親殺し」の罪人たる異母兄弟スメルジャコフを訪問すること、あるいは孤絶の内にある彼に心に向け続けることは、この亡き師が彼に言い残した命令、自分の死後お前は直ちに修道院を出て、俗世で「実行的な愛」に励むのだとの「遺訓」の実践としても全く自然なことであつたろう(一七、二四、七四、十4)。事実アリョーシャは長老の死から三日後、修道院を引き払って町に住まいを見つけ、ドミートリイやイワン、カチェリーナやグルーシェニカ、ホフラコワ夫人やその娘のリーザ(彼女はアリョーシャの婚約者である)、そして次回見るようにイリュージン少年たちの許を絶えず訪れては、彼らの苦悩に寄り添う生活を開始しているのである(十、十一、エピローグ)。このアリョーシャが、母の胎内での自殺さえ口にし、自らの運命への呪詛をイエスに向かって投げつけるスメルジャコフを、しかも彼自身父親フォードル殺害の犯人と信じて疑わぬこの異母兄弟を、どうして無視したままでいようか。作品の小さな文脈から大きな文脈に至るまで、それらが持つベクトルは例外なく、アリョーシャとスメルジャコフとの深い結びつきを指し示すものばかりである。

天使の「くしゃみ」

更にここでもう一度、第1章の冒頭で確認した決定的な事実を思い起そう。マリアがスメルジャコフ自殺の知らせを、警察への通報よりも何よりも先に、まずはアリョーシャに知らせるべく、真夜中の町に駆け出したという事実である。なるほどアリョーシャは、緑色のベンチでの恋人たちの逢瀬を突然の「くしゃみ」で中断させてしまい、久しぶりに与えられたマリアの至福の時を台無しにしてしまったのだ。だが我々はこの「くしゃみ」が逢瀬のエピソードに終止符をもたらしたどころか、逆に、正にここから彼とスメルジャコフとマリア三人の間に「何か」が始まったと考えるべきであろう。さもなければどうしてマリアが、スメルジャコフの死を警察にも誰にも知らせず、真っ先にアリョーシャの許に知らせるべく、闇の中に駆け出すことがあろうか。その「何か」について、ドストエフスキイは筆者に最小限の記述しか許さず、我々読者に自ら推測することを促すのだ。ここに『カラマーゾフの兄弟』の捉え難い奥行きの高さと、そこに分け入ることの困難さ、そしてまたそのことが持つこの上ない豊穡と魅力もあると言うべきであろう。

だがここでも我々は拙速を避け、慎重であるべきだ。「天使のくしゃみ」から「何か」が始まったとしても、果たしてスメルジャコフがこの天使を受け容れたかどうかは明らかではない。むしろ運命への復讐を果たしたスメルジャコフが、血の一滴を踏み越えた罪人への神の裁き、「悪業への懲罰」と直面しながらも、天使アリョーシャを頑なに拒み続け、孤

絶の内に留まり続けたと考える方が可能性は高いと考えられる。事実、本章の最後〔6〕で見るアリョーシャの「祈り」は（十一10、第6章〔5〕）、そして彼が編纂した「ゾシマ伝」の最後に置かれた自殺者についての彼の考察は（六31、第6章〔5〕）、亡き兄スメルジャコフに対するこの上なく冷徹で厳しい姿勢に貫かれたものである。「生と神への呪い」に取り憑かれ続けた兄の悪魔的悲劇的生の実相を、アリョーシャはまずは曇りのない心で捉え、その上で愛情を以って表現するのである。我々はスメルジャコフの生と死を見つめるアリョーシャのこの冷徹で厳しいリアリズムと、イエスとゾシマ長老に由来する「実行的な愛」とがどのように結びつくかについて、次回以降も考察を試みてゆこう（殊に「研究会便り（11）・（13）」）。

力に満ちたスメルジャコフ

イワンの二度目の訪問（十一7）。マリアの新しい住まいにイワンが訪れた時、既にスメルジャコフは心身共に健康を回復していた。筆者によれば、彼の訪問客に対する態度は自信に満ち傲然たるもので、かつ敵意と憎悪に満ちていたとされる。「なぜ、のこのことやってくるのですか？ だってあの時[一度目の訪問の時]、話は全てついてはいるはずではありませんか」。イワンには、スメルジャコフから自分に向かって、このような無言の言葉が発せられているかのように思われたと記される。前回の病院への訪問時、スメルジャコフはイワンが繰り出す今更ながらの問いに、その鋭利な知性とは裏腹に、若旦那が父親殺しの具体的経緯については殆ど何も知らないこと、またその罪についても殆ど自覚してはいないことを見て取ってしまったのだ。今やスメルジャコフにとってイワンとは、フォードル殺害前に示していたあの臆病さと怯えと躊躇^{ためらい}を、なおそのまま引きずり続ける若旦那でしかなかったのである。

イワンを覆う被膜、あるいは原罪性

事件の経緯に関する把握の余りもの少なさ、そして罪の自覚の余りもの遅さと鈍さ。「父親殺し」に関しイワンが示すこれらの事実には、スメルジャコフならずとも我々読者でさえもが驚かさねずにはいない。父親殺害から、裁判前日に至ってようやく完全に己の罪を自覚させられるに至るまで、二か月間イワンは何と闘い続け、何に妨げられ続けるのか。

だが我々はイワンが、「父親殺し」に対する罪を漠然としか感じずに、半覚半酔の酔っぱらいの如く、ただスメルジャコフの許を訪れ続けていたと考えるとしたら、的外れであろう。モスクワにおける「神殺し」と「イエス磔殺」。イワンはこれら思想的な一線の踏み越えとは全く異なる新たな踏み越えを、つまり血の一線の踏み越えを故郷において、教唆犯としてとは言え、現実には果たしてしまったのだ。「父親殺し」に至るまでの彼の「桁外れの興奮」について、我々は既に本章の冒頭から具^{つぶさ}に見ている〔1〕。このイワンが自らの罪を知っていなかったわけがない。また彼が懼るべき恐怖感と無縁の人間であったはずがない。だが彼はこの罪意識と恐怖感を、存在の底に達する決定的自覚にまでもたらずることが容易

には出来なかったのだ。言い換えればイワンは、「裁きの神」との出会いによる己の根源的罪性の自覚にまでは容易に至れなかった、あるいは至ろうとしなかったのである。つまりイワンは曖昧模糊とした何重もの被膜を通すかのように、漠然とした罪意識に苦しめられつつも、その最終的な自覚から逃げていたと言えよう。この後で我々は兄弟二人の三度目で最後の対決を見るのだが、ここでスメルジャコフによって自分の罪を最終的決定的に悟らされ、また神との出会いに導かれるや、イワンはそれまで自分の目と心を覆っていた何重もの被膜、「恐れ」と「夢」と「幻」について初めて気づかされ、それに言及するであろう。己の罪の極めて緩慢な自覚、また「裁きの神」との極めて緩慢な出会い。またそれらとの直面からの無意識の逃走。これこそドストエフスキが鋭利な知の人イワンに割り当てた「悪業への懲罰」に他ならない。そしてこれはドストエフスキがイワンの背後にみつめる、非聖化の極を生きる近代の人間に割り当てられた「悪業への懲罰」でもあると考えるべきであろう。この懲罰劇を刻むドストエフスキの筆は圧倒的であり、容赦はない。

この問題について、最も確かな証言者となるのはアリョーシャである。我々は本章の最後〔6〕で、兄イワンにおける罪の自覚の遅さについて、そして彼に対する神の最終的な勝利について、アリョーシャが祈りの中で言及するのを見よう。そこで彼がイワンの心を、「神とその真実」に「未だ従うことを欲しない心」として極めて冷徹かつ明晰に捉えていたことが確認されるであろう（十一10）。兄イワが自らの「恐れ」と「夢」と「幻」で作り上げた壁を、弟は明確に見抜き、言葉にするのだ。我々はそれが悪魔の「否定の精神」に身を委ね、自らを神としたイワンの「倨傲の精神」の根深さであり、彼の原罪性そのものであると考えたい。イワンの罪意識と神認識の問題については、本章の最後で〔6〕、スメルジャコフとの関係において改めて考えよう。

一瞬の覚醒

イワンとスメルジャコフの二度目の対決の場に戻ろう。今や厄介者を追い払おうとするかのように、また木で鼻を括るような調子で、スメルジャコフからイワンに宣告が下される——あなたは父親フォードル殺しの願望を持っていたのだ。ところが勇気のないあなたは、自ら手を出すことなど出来はしなかったのだ。この私をあてにし、全てを任せてしまったのだ（十一7）。

全て見抜かれていたのである。父親殺しの願望を持ち、その願望の実行を人神理論によって正当化しながら、実際には血の一線を踏み越える勇気はなく、「前衛的肉弾」の下男に全てを放り投げ、その後をのこのこと随き従ってゆき、遂には尻尾を巻いて逃げ出してしまったこと——イワンはこれら全てを、スメルジャコフに見抜かれていたのだ。人神思想の内実が完膚なきまでに白日の下に曝され、かつての悪魔的高揚感も跡形もなく微塵に吹き飛ばされ、恥辱感と罪意識の来襲にイワンはパニックに陥る。彼が駆け込んだのはカチェリーナの許であった。だが彼女がイワンに示したのは、父親殺害の意図をあからさまに記したドミートリイの手紙であった。それは酔っぱらったドミートリイが怒りに任せて

書いた手紙でしかなかった。ところがイワンはこれにすっかり安心をさせられ、その後一か月ほど、彼の心からスメルジャコフは消え去ってしまうのである。一瞬の覚醒は、一瞬の内に吹き飛んでしまったのだ。繰り返しとなるが、イワンの内に深く巣くう原罪性、「神とその真実」に「未だ従うことを欲しない心」を暴き出すドストエフスキイの筆は圧倒的であり、容赦ない。

スメルジャコフの激変

さてこの間イワンの許には、スメルジャコフが重い病気に陥り、頭もおかしくなったとの噂が二度ほど流れてくる。彼は発狂に至るであろう、このような見立てを語る医師さえいた。だがこれらの情報も、ドミートリイの手紙で安心し切ったイワンの耳をただ右から左へと通り過ぎて行くだけであった(十一7)。

ところでイワンの二度目の訪問の時、スメルジャコフは完全に健康を回復しており、その知力も気力も充実し切っているように見えたことは、先に確認した通りである。だがその後一か月の間に、イワンの存在を完全に葬り去ったスメルジャコフの内部では、彼自身の精神を発狂に追いやり、その肉体を極限まで衰弱させ、果ては自らを自殺に追いやるような何かが確実に、しかも急速に進行していたのである。

父親殺害への暗黙の了解を与えたイワンの、故郷からの逃走。それに続き、いよいよ偽りの癲癇発作。父親殺害の決行。それと共に追いつまされた恐怖と、続いての真正の癲癇発作の来襲。意識不明のままの病院への収容。イワンの病院訪問。マリアとの婚約。マリア宅への収容。健康の回復。そして再びイワンの訪問 —— これら激烈な体験をくぐり抜けてきたスメルジャコフは孤絶の中、イワンが束の間与えられた偽りの平安の向こうで、いよいよ完全な発狂さえ予想される危機的な状況に追いつままれていったのだ。血の一線を踏み越えた殺人者に臨む「怒りの神」の懼るべき裁き、「悪業への懲罰」の現前。彼は決定的な危機に差し掛かっていたと考えるべきであろう。

この危機に当たって、アリョーシャが彼を「毎日のように」訪れていたとするならば、彼に対してスメルジャコフは如何なる反応をしたのか。彼はこの天使を受け容れることを完全に拒絶してしまったのか。彼とマリアの間には、そしてマリアとアリョーシャの間には如何なる会話が交わされていたのか —— スメルジャコフを理解する上で不可欠と思われるこの一か月について、ここでも筆者は直接何も語らない。この作品における最も懼ろしい空白であり、謎の一か月である。この問題も我々が最終回まで検討し続けねばならない。だがその謎の多くを明らかにしてくれるのは、次に報告されるイワンの三度目にして最後の訪問で交わされる二人の会話である。緩急を交錯させ、作者が周到に記すスメルジャコフの心身の激変、運命への復讐を果たした殺人者が直面させられる「悪業への懲罰」の内実とその結末について、以下に見てゆこう。

(3). イワンの三度目のスメルジャコフ訪問

シリアの聖イサク

イワンの三度目の、そして最後のスメルジャコフ訪問(十一8)。マリアによればこの時、スメルジャコフの健康は既に危機的な状態にあり、その精神も「ほとんど正常ではない」ところにきていた。しかし暴れるわけではなく、「この上なく静かにしている」のだという。「あまり長くお話にならないで下さい」。懇願するマリアを背に、部屋に入ったイワンがそこで目にしたのは、「すっかり面変わりがし、すっかり痩せ、顔は黄ばんだ」スメルジャコフであった。その「目は落ち窪み、目の下には青い隈があった」。前回の訪問時に見せた心身の絶頂ぶりとは一転した激変。死相が出たとも言うべき鬼気迫る相貌で、この青年は「この上なく静かに」一体何と向き合っていたのか。

次いで筆者は読者に注意を促す。イワンとスメルジャコフの間にあるテーブルの上には、一冊の「黄色い表紙の何か分厚い本」が置かれていた。『シリアの聖イサクの苦行説教集』である。筆者は既にこの本をグレゴリーが所有するものとして紹介している(三1)。六つ指で生まれた自らの子が死に、他ならぬその埋葬の夜スメルジャコフの誕生に接したグレゴリーが、この「自然界の混乱」を前にして心を「神様のこと」に向かわせ、旧約の『ヨブ記』と『殉教者列伝』と共に取り上げたのがこの本であった(第1章³)。筆者はグレゴリーが、聖イサクの説教集を理解できぬまま何年も根気よく読み続けていたと記す。シリアの聖イサクとはゾシマ長老と同じく、人間が犯す如何なる罪をも超える神の絶対愛を説いた聖者である。だがその内容の明快さと深遠さと比べると、彼が残した文章は実に複雑かつ難解で長大なものだ。先に見たように私設の「寺子屋」でスメルジャコフに聖書教育を試みはしたものの、直ちにこの生徒から創世記における光の始原の問題で問い詰められると、張り手で応えるしかなかったこの教師には、聖イサクの本はいささか荷が重かったのであろう。(聖イサクについては最終回の第6章⁵で取り上げよう。また拙著『カラマーゾフの兄弟論』後篇Ⅶと補遺も参照されたい)。ドストエフスキイはこの本をグレゴリーに代り、新たにスメルジャコフの手に取らせたのである。ドストエフスキイは、運命への復讐を遂げたこの青年を、その直後から「ゲヘナ」に投げ込み、懼るべき「裁きの神」の前に立たせる一方、人間の如何なる罪をも超える神の絶対愛を説く聖者イサクとも向き合わせたのだ。発狂の末に死に至るであろうとまで医師に言わせるほどの、死相が出るほどの鬼気迫る相貌で、一人「この上なく静かに」スメルジャコフが向き合っていたのは、恐るべき「裁きの神」と共に、シリアの聖イサクが説く「愛と赦しの神」だったのである。

スメルジャコフがこの本を如何に読み、如何なるところに至ったのか。この点について筆者は何も語らない。我々もここで性急な結論を追うことは避け、この後も二人の三度目で最後の対決を見てゆこう。また最終回の第6章ではこれらを視野に入れて、スメルジャコフの自殺についても考えねばならない。いずれにしても、作者ドストエフスキイが心身共に既に危機的な状況にあるスメルジャコフをして、「裁きの神」と「愛と赦しの神」という旧約的新約的な両神と向かい合わせていたという事実を、我々は最終回まで記憶に留め

ておこう。

「正にこれは神様です」

さて最初の訪問以来、イワンがスメルジャコフにぶつける問いとはただ一点、ひたすら父親殺しの真相、あるいはその具体的な経緯に関してであったと言っても過言ではない。そしてこの言動はスメルジャコフによって驚きと軽蔑の対象となり、その心からイワンは殆ど完全に葬り去られてしまったのである（「なぜ、のこのことやってくるのですか？ だってあの時、話は全てついているはずではありませんか」）。今やスメルジャコフには彼自身に臨む懼るべき「悪業への懲罰」との対決があり、一方イワンにはイワンへの「悪業への懲罰」が臨んでいたのだ。二人の道は大きく離れてしまったのである。

そして三度目の対決。筆者はイワンに対するスメルジャコフの態度が今や「憎悪」から「軽蔑」へ、と言うよりはむしろ殆ど「嫌悪」に近いものへと変わったと記す(十一8)。スメルジャコフが向き合うのは、最早帰郷時に輝いて見えたあの若旦那イワンではない、この若旦那が彼に与えるのは今や嫌悪感のみなのだ。「家にお帰り下さい。殺したのはあなたではありません」。こう吐き捨て、スメルジャコフがイワンを追い払おうとした時のことである。「俺でないことは分かっている・・・」。言い淀んだイワンは、答えを最後まで言い切ることが出来なかったとされる。相も変わらず他人事のような話の連続に、「憤怒を込めて」、スメルジャコフから最後の宣告が下される。

「お分かり・ですって？ では申しましょう。その、あなたが、正に殺したのですよ」
(十一9)

イワンこそが「主犯」であり、自分は「共犯者」に過ぎない——「憤怒」と共に発されたこの宣告に、イワンの身体が小刻みに震え始める。イワンが示し始めた「懼れ」と「真剣さ」に、なんと今度はスメルジャコフが衝撃を受ける。

「本当に、本当に、今までご存じなかったのですか」

「分かるか？ 俺は懼ろしい、お前は夢ではないのかと。お前は幻で、俺の前にこうして座っているのではないのかと」(同上)

イワンの眼と心を覆っていた被膜、「懼れ」と「夢」と「幻」の一切が消え去り、彼が漠然と直面させられ脅かされ続けてきた、そして密かにそれとの直面から逃げてきた「懼るべきもの」が、いよいよ姿を現す時がきたのだ。スメルジャコフが語り出すのは「懼れ」と「夢」と「幻」の向こうに厳存するもの、イワンとスメルジャコフ両者に臨む「第三の存在」についてである。

「どんな幻もここにはおりません。私たち二人と、その他にもう一人、第三の存在以外には。疑いなくその存在は今ここにいます。その第三の存在は、私たち二人の間にいるのです」

「誰だ、それは？ 誰がいるのだ？ 誰だ、第三の存在とは？」

「この第三の存在とは、^{ボフ}神です。正にこれは^{サーマエ・エータ・ブラヴィヂェーニエ}神^{オン}様です。それが今ここに、私たちの傍にいます。ただ、あなたには探しても、見つかりはしません」

「お前が殺したなどということは、嘘だ！ お前は気が狂ったのか、そうでなければこの前のように俺をからかっているのだ！」（同上）

『カラマーズフの兄弟』における、最も懼るべき^{エビフアニー}神現前の場面の一つと言えよう。スメルジャコフは「気が狂った」のでも、イワンを「からかっ

て」いたのでもない。完全な発狂を予想され、死相が出るほどまでに憔悴し切り、無数のゴキブリが這い回る部屋に孤絶し、「この上なく静かに」この青年が向かい合っていたのは「神」であり、「神様」であり、「それ」だったのだ。「正にこれは神様です」、これはイワンが第一回目の訪問をした時に彼が発した「正にこの神様」という言葉と活用形が違うのみであり、同じ表現だと考えてよいであろう。あの時も、そして今も、二人の「傍ら」に存在していたのは「正にこの神様」だったのだ。スメルジャコフは「正にこの神様」の懼るべき「裁き」の前に立ち、またシリアの聖イサクが示す「愛と赦しの神」の前に立ち、その狭間で、死相が出るほどまでに憔悴し切り、「この上なく静かに」自らの罪と対峙していたのである。このスメルジャコフの目の前にいるのは、未だもって父親殺しの罪を自覚し切れない、同時にそれから逃げ続けてきたイワンである。若旦那を覆う「懼れ」と「夢」と「幻」。それらの向こうに「疑いなく」存在する「正にこの神様」。スメルジャコフは若旦那イワンの眼と心を何重にも覆う^{とぼり}帳を啓き、この「神様」を「憤怒」と共に指し示したのだ。

ここでも早急な結論は避けよう。イワンが導かれた罪の自覚、そして彼に臨んだ神、これらについては今回のテーマであり、この場で続いて考えねばならない。だがスメルジャコフの「悪業への懲罰」と神体験については、なお第4章と第5章の考察を経た上で、彼の自殺との係わりで、最終回（「研究会便り（13）」）の主要テーマとして改めて考えることにしよう。

「神が見ておいでだ」

震えるイワンに向かい、スメルジャコフは隠していた三千ルーブリの札束を取り出して見せる。この札束を前にスメルジャコフは、フォードル殺害の具体的な経緯と、イワンが不審に思っていたことの全てを明らかにする。それは父フォードルの脳天を目がけて文鎮を振り下ろし、血の一線を踏み越えた瞬間から、その後彼が如何に懼るべき恐怖に捕えられたかをも含めて、生じたこと全てについての具体的かつ詳細な説明であった。筆者はこの時のスメルジャコフからは、イワンに対する「憤怒」は消えていたと記す。今や彼は若

旦那に対し、幼な子に説き聴かせるかのように、フォードル殺害に関わる全てを報告したのである。質問をするイワンの声も穏やかなものであった。筆者はこの時の二人が、テーブルを囲んで仲良く話でもしているかのようにであったと記す。

イワンは今や、完膚なきまでに自らの「罪」を自覚する。「お前は馬鹿ではない。俺が考えていたより遥かに頭がいい……」。

だがしばらくしてからのことだ。イワンは突然大声で叫び始める。罪の自覚に続く、イワンの神との出会い。そして新たな悲劇の開始である。

「おい、この不幸な、見下げ果てた奴め！ お前には分からないのか。今までまだ俺がお前を殺さずにいるのは、お前を明日の裁判で供述させるために抑えているからに他ならない。神が見ておいでだ……」(同上)

「神が見ておいでだ」。何よりもまず、この叫びに注目しよう。「神を見る」のではなく、「神が見ておいでだ」。この上なく鋭利なユークリッド的知性の持ち主であり「目撃者」であるイワン、神認識の不可能性ゆえに神を天上に追放してしまったイワンが、神に「目撃」される。彼ならではの、百八十度逆向きの神との出会いである。スメルジャコフのそれに続き、ここにもまた一つ、類い稀な神顕現の形が我々の前に示されたと言えよう。イワンとスメルジャコフ。これら「ロシアの小僧っ子」たる異母兄弟二人は、父親殺しに対するそれぞれの「悪業への懲罰」の末に、共にそれぞれの神の前に立ったのだ。

だがここには既に、新たな悪魔的悲劇が開始されていたのである。「兄弟殺し」である。この悲劇については、イワンの精神の在り方を、殊に彼の神体験の特性を理解する上で極めて重大なものであり、項を改めて、極めて短い、次の⁵で正面から取り上げておこう。

5. 新たな悲劇、「兄弟殺し」

「証拠品」としてのスメルジャコフ

「今までまだ俺がお前を殺さずにいるのは、お前を明日の裁判で供述させるために抑えているからに他ならない」。この言葉に注目しよう。「神が見ておいでだ」、この決定的な言葉と共に、否、この言葉のすぐ前に、イワンはこのような粗暴とも威圧的とも言うべき言葉を発しているのだ。これは父親を殺害したスメルジャコフへの怒りでも、復讐心の迸りでもない。またこの時イワンは、ただスメルジャコフを威圧し脅していたのでもない。自分とスメルジャコフとを共に見つめる「裁きの神」の前で、他ならぬ彼自身が威圧され、怯えさせられていたと考えるべきであろう。罪の最終的な自覚に至り、神に見つめられる自分を発見したイワン。イワンにとっての神体験とは、自分自身とスメルジャコフとが直ちに神の裁きの場に立たされ、また明日の裁判の場に立たされ、それぞれの罪の告白と供

述を果たせとの至上命令として自覚されたのだ。彼はこれら二つの裁きの場で、罪の告白と供述とを共に確実に果たせとの召喚の声、絶対命法を感じ取ったとも言えよう。ゾシマ長老の前でなされた「教会裁判論」を巡る論議において、彼が教会と国家とによる二つの裁きを問題としたのは決して議論のための議論ではなかったのである。今やイワンにとり明日の裁判への出頭とは、神の裁きの場と人間の裁きの場との両者において自分の罪を自白・供述し、同じくスメルジャコフにも自白・供述させることなのだ。

更に敢えて言えば、今やイワンにとってのスメルジャコフとは、神の前に立つ「罪人」であると共に、否、それよりもフォードル殺害の実行犯として、彼が犯行の際に盗んだ三千ルーブリと共に、法廷に提出されるべき動かし難い「証拠品」なのだ。神の眼に射すくめられたイワンには、眼前の「不幸な見下げた奴」の心の内に分け入り理解をしようという意図も、また余裕もない。ここにいるイワンとは、この下男の内に「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」の存在を認めるや、「嫌悪感」と共に距離を置いてしまった若旦那イワンに他ならない。後に悪魔が暴露するように（十一10）、事実この時イワンは自分の指示に従う気配のないスメルジャコフを前にして、その自殺を予感しつつも、彼を見捨ててその場を去ってゆくであろう。「神殺し」と「イエス磔殺」と「父親殺し」に続く、新たなる「兄弟殺し」の悲劇である。イワンの奥深くに宿る原罪性を見つめるドストエフスキイの眼は、なお容赦なく厳しい。

本章では最後にアリョーシャの「祈り」に目を向け、「悪業への懲罰」が臨んだ二人の兄たちを傍らで見守り続けたアリョーシャが、神の前で兄たちについて、如何なる判断と思いを表明するかを見ておこう。アリョーシャの祈りとは、兄たちが「悪業への懲罰」の苦しみの末に、神によって如何なる方向に導かれるかについて、作者ドストエフスキイが我々読者に告げる予告であり、かつ預言とも考えるべきものであろう。

6. アリョーシャの祈り

スメルジャコフとの三度目のそして最後の対決。イワンはスメルジャコフの自殺を予感しつつも、彼の許を去ってゆく。帰宅したイワンを待ち受けていたのは、彼の内なる悪魔であった（十一9）。イワンの人格崩壊は既に悪魔の幻視と、その悪魔との対話という段階にまで進行していたのである。最後のスメルジャコフ訪問の直前、カチェリーナもアリョーシャに訴えている。「あの人は気が狂っているのです。ご存知ないのですか、あの人の気が狂ってしまったことを？」（十一5）。

悪魔はイワンに、モスクワにおける彼の思索の足跡を思い起こさせる。つまりイワンは崩れゆくその人格と意識の中で、モスクワにおける自らの思索の足跡を振り返っているのだ。イワンは、自らの「神と不死」探求の全てが悪魔の導きに沿ってなされたものであり、

その行き着くところとは悪魔の「否定の精神」による神の否定と、イエスと「キリストの愛」の排斥であったこと、しかもその否定の試みの全てが故郷の家畜追込町において挫折したことを、はっきりと自覚しているのだ。それゆえにこそ彼の内なる悪魔は、あわよくばもう一度自分を力溢れるモスクワ時代に連れ戻し、あの傲然たる「否定の精神」とその高揚感とに輝いていた頃の自分を取り戻すことを夢見ているのだ。

さてスメルジャコフ自殺の報をもたらすべく、イワンの住まいに駆けつけたアリョーシャが見出したのは、悪魔との対決によって憔悴し切り錯乱の極にある兄の姿であった。アリョーシャはこの兄に、マリアがスメルジャコフの死について誰にも知らせず真っ先に、走り通しで自分の許に駆けつけたこと、そして彼女が半ば狂乱状態で全身を「木の葉のように震わせていた」ことを告げる。更に彼は、折り返しマリアと彼女の住まいに駆けつけた時、スメルジャコフはまだ壁からぶら下がったままであったこと、「己自身の意志と好みによって己の命を絶滅させる。誰にも罪を負わせぬため」と記された遺書が残されていたことを伝えるのであった。アリョーシャは、自分の知らせを聞くイワンの相貌の異様さに愕然とする。だがこの兄から返ってきた言葉は、更に驚くべきものであった。「俺は知っていたんだよ。奴が首を吊ったことは」。「誰から知ったのですか?」。アリョーシャの問いに対して返された答えは「あいつ」、すなわち悪魔であった(十一10)。

兄イワンが発する支離滅裂な言葉に根気よく耳を傾け、アリョーシャがようやく兄を鎮めすかし、床に寝かしつけた後のことである。筆者はアリョーシャが奉げる神への祈りと瞑想について報告をする。筆者がアリョーシャの祈りを読者に報告するのは、「場違いな会合」の日の夜に続いて二度目のことだ。このことによって主人公アリョーシャの神との対話が読者に開示され、また彼の内で進行する複雑な心的葛藤を知る手掛かりも与えられるという点で、これら二つはドストエフスキイ文学の中でも稀有な場面として注目すべきものである(アリョーシャの「祈り」については、拙著『カラマーゾフの兄弟論』前編Ⅱを参照)。

さて神に対してアリョーシャが祈り、思いを巡らせるのは兄イワンの「病気」について、またもう一人の兄スメルジャコフの「自死」について、そしてこれら二人の兄の運命を司る神の経綸についてである。

「彼[アリョーシャ]にはイワンの病気のことを分かってきた。《誇り高い決心の苦しみだ。深い良心なのだ！彼の信じなかった神とその真実が、未だ従うことを欲しない心を征服しようとしていたのだ》。《そう》、既に枕に横たえたアリョーシャの頭の中を、このような考えが掠めた。《そうだ、スメルジャコフが死んでしまった以上、兄の供述を誰も信じはしないだろう。だが兄は出かけて行き、供述をするだろう！》。アリョーシャは静かに微笑んだ。《神様が勝つのだ！》。こう彼は考えた。《真実の光の中に起ち上がるか、あるいは・・・信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で身を滅ぼすかだ》。アリョーシャはこう悲痛な気持ちで付け加えると、再びイワンのために祈るのであった」

(十一 10)

この短い祈りと思索・瞑想の内に示されたことは実に多い。我々は以下の二つに注意しておこう。まず「彼の信じなかった神とその真実が、未だ従うことを欲しない心を征服しようとしていたのだ」。アリョーシャは目の前に横たわるイワンの「病氣」が、いよいよその最終段階に来つつあることを確信したのである。その病氣とは、ただ単に彼の心身の乱調を指して言われたのではない。アリョーシャは兄イワンの神否定と、イエスと「キリストの愛」の排斥と、それに続くスメルジャコフとの父親殺しにまで及んだ「罪」のことを十二分に知り、兄の内なる悪魔の抵抗のことも承知していたのだ。しかし今やいよいよ兄が、その罪の最終的な自覚に至りつつあること、そしてその罪を正面から受け容れようとの「誇り高い決心」に至りつつあることを知ったのである。「神様が勝つのだ！」。罪人イワンの良心を通して臨む神の怒りと裁き、師ゾシマ長老が予言した「悪業への懲罰」が終わりに近づきつつあること、「キリストの律法」がイワンにおいて成就しようとしていることをアリョーシャは確信したのだ。「実行的な愛」の人アリョーシャの心が日頃何処に向かい、また如何に動いていたかがここに明らかとなる。

次にアリョーシャの心が向かうのは、やがて「真実の光の中に起ち上がる」であろうイワンとは対照的に、「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で身を滅ぼす」に至ったもう一人の兄スメルジャコフである。壁にぶら下がった兄を目の当たりにし、その遺書に接したアリョーシャはこの時この兄が、イワンとは逆に悪魔の手に渡り、「身を滅ぼした」と考えたのだ。アリョーシャにとり、スメルジャコフが叩きつけた運命と神への「恨み」と「憎悪」、「神と生命への呪い」(六3I)は、それほどまでに激しいものであり、その末に彼が選び取った死は、それだけ一層恐ろしく痛ましい衝撃だったのだ。

アリョーシャとイワン、そしてアリョーシャとスメルジャコフ。これら三人の異母兄弟たちが父親フォードルの殺害後に、それぞれ如何なる形で交流を続けていたのかについて、筆者は具体的には何も記さない。だがアリョーシャの祈りが我々に示すのは、この末弟が二人の兄の「病氣」について、如何に的確にかつ深く把握していたかということである。二人の兄の傍らに寄り添い続ける「親切な人」、「実行的な愛」の人アリョーシャがここにいる。

「十字架への道」と「絞首台への道」

最後に確認すべきは、アリョーシャの祈りに先立つ錯乱状態の中で、イワンが発した二つの言葉である。その支離滅裂な饒舌の中でイワンは、スメルジャコフが「絞首台」への道を選んだのに対し、自分は「十字架」への道を選んだと口にするのだ。

「明日は十字架で、絞首台ではない。否、俺は首を吊ったりはしない！ お前は知っ

ているな。俺は決して自殺など出来ないことを、アリョーシャ！ 卑劣さからだろうか？ 俺は臆病ではない。生への渴望からなのだ！ 何故俺はスメルジャコフが首を吊ったということを知っていたのだろうか？ そうだ、これはあいつ[悪魔]が言ったのだった・・・」(十一10)

「十字架」と「絞首台」。人格崩壊の崖を転げ落ちながらイワンは、自分たち二人の「父親殺し」が歩む道を的確に把握していたのだ。イワンはスメルジャコフが「絞首台」への道を取ったのに対して、自分が「十字架」への道を取るのには「卑劣さ」からでも「臆病」だからでもなく、内なる「生への渴望」からだとする。自らの内なる「生への渴望」を正面から生きること、それは「卑劣さ」などではなく、自らの「十字架」を負って生きることには他ならないこと、またこれが「生への渴望」を浄化し聖化する唯一の道であることを、イワンは解体しつつある意識の中で既に捉えていたのである。ドミートリイの予言は的確なものであったと言うべきであろう。

このイワンを受けてアリョーシャは「十字架」を選んだイワンが、この先歩むべき道は気が遠くなるほど長く険しいとはいえ、兄がやがていつの日か「神とその真実」に摂取され、「真実の光の中に立ち上がる」ことを祈ったと考えるべきであろう。

だがアリョーシャはイワンのみに眼を向け、彼のみをよしとして、スメルジャコフを斥けたわけではない。この「実行的な愛」の青年は、「絞首台」への道を選び取ってしまったスメルジャコフとも、兄に代わって正面から向き合い続けるであろう。つまり彼は「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で身を滅ぼした」もう一人の兄の死と生の意味についてなお考察を続け、その冷徹で的確なリアリズムが捉えた亡き兄の生と死を、自らが編集する「ゾシマ伝」の最後にゾシマ長老の「自殺者論」と重ねる形で記し、それを亡き兄への鎮魂歌、その痛ましい悲劇的生と死への魂の底からの葬送の辞として捧げるであろう。このスメルジャコフへの鎮魂歌、葬送の辞については第6章（「研究会便り（13）」）で詳しく検討しよう。その前に我々は次の第4章と第5章で、アリョーシャとドミートリイの生と思想についても、スメルジャコフとの関係を中心として、なお様々な角度から考察しておかなければならない。

(第3章 了)

2018年2月

2018年12月一部加筆修正

次回、第4章、研究会便り(11)について

今までスメルジャコフとイワンという悪魔の「否定の精神」を内に宿す異母兄弟について検討してきたのに続き、今回はこれら二人とは対照的なもう一人の異母兄弟であるアリョーシャについて検討をします。

作者ドストエフスキイは、この青年が持つ烈しい求道精神を、ゾシマ長老との出会いを介し、遙か遠く福音書における十字架上のイエスに根を置く精神として位置づけ、それを「キリストの愛」「実行的な愛」、あるいは「一本の葱」とも呼び、この作品を支える根底の精神とします。

今回はこの「実行的な愛」の人アリョーシャが、「罪なくして涙する幼な子」の極を生きる少年イリューシンの不幸に寄り添う姿を追い、この物静かな信と愛の人が持つ「強さ」を確認し、彼がもう一人の「罪なくして涙する幼な子」であるスメルジャコフに向かう姿勢を検討する作業（「研究会便り（13）」）の土台造りともします。